

陶器祭の目標として、吾等の頭に焼きつけられることは、身近に手を引張つてくれる人があるようでもことに心強いものが出来た気持になれるのである。かくて京の陶器祭を意義あらしめ、やきものは京都、京都は陶器の都であるとしたものである。一日も完成の早からん事を祈つてやまない。（昭和二十八年七月記）

第二篇 明治篇



五代 道八造 雲錦楓画鉢（京都市工芸指導所蔵） 径17cm×高サ10cm

第一章 本邦陶磁器業界の推移

慶応三年（一八六七）明治維新の幕があげられ、廢藩置縣を始めとして、内政の大改革となり、外国との修交も盛んとなり、これらが我が国の産業にあたえた影響は大きかった。陶磁器業界にもまた大きい変革が見られる。

一、国内陶業地の技術の交流

廢藩置縣の結果、各地の陶磁器業は従来、主として藩の保護を受けていたのが、その保護、援助も不可能となり、甚大な影響を受けたが、他面、封建時代における各陶業地の秘密主義の障害を打破つて、各地の技術交流を促すこととなった。

二、国内需要のみならず、初めて輸出らしい途も開けた。

即ち、明治政府による外国博覧会参加、欧米の新技術導入等の振興策を機として、陶磁器も国内需要のほか、新たに輸出にも進出するようになり、次第に発展して我国産業の一形態を整えるに至った。

註、明治元年の陶磁器輸出額

二万三千円

明治十四年の陶磁器輸出額

七万一千円

（全国生産額一五六万五千円）

このように一応の形態を整えた業界も明治十四年（一八八一）以降は、輸出不振に加うるに、内需も振はず、各業界共、非常な不況に見まわれ、岐阜、愛知等陶業地の減衰退は甚しいものがあつたと伝えられている。漸く同十九年（一八八六）頃より、市況回復に向つたが、当時の京都の業界も御多分にもれず不況の波にあえいだ。

この間海外需要は、初期の美術陶器より、遂次日用陶器への転換を示し、その需要に応ずるため、大量生産方式採用の動きが見られる。

註、明治初年以來輸出面で非常な進出を見せていた有田香蘭社は、明治初年洋式機械を輸入したが成功せず、又、同二十年京都陶器会社がフランスから機械を購入し技師を招聘して工場制工業にのり出し、意気盛んであったが、時期尚早のためか、これ又挫折し、これよりしばらくは大規模工場制に着手するものは中絶した。

ついで日清、日露戦後を機として、海外需要も一段と増大し、本格的工場制工業に推移し、日本陶器合名会社（明治三十七年名古屋）をはじめ、松風陶器合資会社（明治三十九年、京都）、日本硬質陶器株式会社（明治四十一年、金沢）、松村硬質陶器会社（明治三十六年、名古屋）等の諸

会社が設立されて以来、順調な発展をなして大正時代に入った。

註、明治四十年の陶磁器輸出額（全国）

七二二万円

全国生産額 一二九四万円

以上のように、生産額の増大に伴ない、技術方面も、明治二十年前後を中心として大いに発展、進歩し、西洋コバルト、水金の使用、銅版転写の修得、石炭焼成窯、石膏型応用、粉碎、製形等に機械を使用する等、目ざましい進展を遂げた。

これら新手法を利用して、伸長を示した陶業地は、伝統陶業地では、京都の外有田、瀬戸（愛知県）、九谷（石川県）等、新興地では、美濃の土岐郡（現岐阜県）伊予の砥部（愛媛県）岩代の会津（福島県）等があり、又備前の伊部（岡山県）、近江の信楽（滋賀県）、尾州の常滑（愛知県）等も進歩し、出雲の布志名、伊勢の万古、淡路（兵庫県）等も伸びている。

註、輸出面において明治初年の輸出先は主として米国であったが、独乙製品と競い合って、やがて中国・南洋にも輸出されるようになった。

第二章 京都陶磁器業界

第一節 京都陶磁器業界の概要

長年王城の夢を誇った京都も、東京遷都となるや、政界は勿論、産業界においても混乱をまぬかれず、陶業界も沈滞を心配されたが、この頃より我国陶磁器業界が繁栄の途を辿るにつれ、京都でも粟田焼が輸出面に急進的發展をとげ、錦光山等の名が全国的に喧伝されるようになった。又この勢は五条清水にも及び、競って輸出に乗り出す業者が増えはじめた。しかし、やがて海外需要が美術品中心から一般日用必需品に移行し、この情勢に應ずる近代工場制が要請される時代となつたが、京都では業界挙げてそれへの適応態勢を整えるには至らなかった。

但し、この間、結果においては初期の目的を達成することはできなかったとはいえ、明治二十年になると、当地にも海外進出という洋々たる希望をもつて、京都陶器会社が登場したことはその規模においても全国的に注目すべきことであつた。しかし同社の狙つた近代的工場への急速な転換は遂に成功に至ることができなかった。この原因は地元の協力の不足もあつたろうし、一般に当時の経営形態の遅れもあり、又当時の技術水準をもつては折角の大工場組織を充分に生かすことができず、発足間もなく挫折してしまつたのは返す返すも残念なことであつた。

この間、京都陶磁器業界の辿つた道には多難なものがあつた。例へば、明治十四年を一頂点としてその後の全国的な不振時代には当地も大不況に見舞われ、その生産額も同十二・十四年に比較して、不況の底にあつた十六・十七年頃には殆んど半減を余儀なくされている。同時にこれが地元業者の経営状況に及ぼした影響もけだし大なるものがあつた。結局この不況の試練を通じて弱少業者は次第に影をひそめ、経営の強固なもののみが生き残るといふきびしい淘汰作用が行なわれた。

ついで明治二十七年（一八九四）、日清戦役に際会するや、国内不景氣に加えるに、対米輸出の不振、商工業界の先行不安に対する警戒等の悪条件が重なり、業界は不況にあえいだ。程なく、戦勝となり、漸く活況をとりもどした。

明治三十八年（一九〇五）、日露戦後は、戦勝の影響と、北米の好況という好条件にめぐまれ、需要は急速に増え、同四十年頃は京都陶磁器の輸出額が七四万円を記録した。

このような、めまぐるしい好・不況の変化は必然的に当地の粟田陶器と清水磁器にも大きな影響をもたらしている。

まず、明治初年は、古い歴史を持つ、伝統陶業地である粟田を中心として粟田陶器が輸出ブームに乗り、旭日昇天の盛況を見せ、十二、三年頃には粟田の生産額の九〇％以上が輸出に向けられたといわれ、そのまま同二十二年頃までは上昇線を続けていた。

但し、前に述べたように、同十四、五年頃より海外需要がそれまでの伝統的美術品から、一般日用品へと逐次転換の形勢を見せて来たが、粟田陶器はこの需要に適應する条件に合わず、その伸長度も鈍化してはいたものの、なお明治三十九年以降、日露戦勝後の景氣刺激もあつて、粟田陶器は輸出を中心として、依然清水五条地区の生産を凌いでいた。

他方、清水五条を中心とした清水磁器は、江戸末期には新興陶産地として活気を見せていたが、維新以後、粟田陶器が輸出に急激な飛躍を見せていたときも、粟田程、輸出に傾倒せず、主として小規模の、手工業的経営により、内地向を中心とした生産を続けていた。二十五、六年頃は、国内經濟の興隆に活況を呈したため、又粟田陶器の停滞により一時は生産に於て、粟田陶器を凌いだ。その後再び首位を粟田にゆづつていた。

要するにこの時代から大正年代にかけて、粟田陶器は、その伸長に鈍化の傾向を見せながらも依然順調に推移し、清水磁器も、日清、日露両戦役の戦勝による国内景氣の上昇に伴なう内需の増大をバックとして生産は逐次上昇していった。

左に明治時代の業界の動向の主なものを取りあげてみることにする。

明治維新後の社会的、経済的変革は、京都の業界にも、多大な影響を与へた。明治元年（一八六八）、独人ワグネルの来朝以来、酸化コバルトの輸入、西洋絵具の製造法、使用法等が遂次京都にも伝わり、又同七年（一八七四）、京都の丹山陸郎（栗田の陶業者）はオーストリアより水金を持ち帰つて、絵付にはじめて使用するに至つた。

この間錦光山宗兵衛は明治五年（一八七三）、神戸の商館で取引を行い、栗田焼輸出の嚆矢となつた。又松風嘉定（二代目）も同八年頃より、森村組の手を経て輸出磁器の製造をはじめた。

同三年（一八七〇）には、京都府勸業場内に舎密局が設けられ同十一年には独人ワグネルが、理化学工業を指導した。

このようにして、京都でも次第に近代科学応用の機運となり、同十九年、京都陶器会社が設立され、翌二十年、はじめて欧風（フランス式）直立円窯を築造し、又、五十嵐健二が、銅版下絵付をはじめる等、他産地にさきがけて京都の陶磁器は前進のきざしを見せたが、まもなく、京都陶器会社は挫折した。しかし同社に採用された機械、ロクロ等、洋式設備による大量生産方式が京都の業界にあたえた刺激と影響は大であつた。

ついで十九年（一八八六）には五条坂に陶磁器蒐集場が設置され、各国の見本が陳列され、二十五年（一八九二）には翌二十六年開催のシカゴ博覧会視察に、京都陶器会社丹羽支配人の渡米、同年、京都陶磁器商工組合の設立、同二十九年には全国最初の、京都市立陶磁器試験場が五条坂に設立され、藤江永孝場長の指導の下に、その付属伝習所では業界の子弟の教育が行われ、大正、昭和の時代の京焼をになう有名人も多数本所で学んでいる。

又二十年、京都陶器会社設立の頃より、二十七、八年に亘つて、他産地よりの陶工の流入もはげしく、その影響もあつて、従来の焼成窯は漸次拡大され、窯詰方法も、匣鉢積法より棚組法を採用これを併用するところが多くなつた。

三十七年（一九〇四）には松風嘉定工場で、高圧磚子の試作をはじめ、業務の拡大により又大量生産目的のため、三十九年には個人営業を合資会社に改め、ドイツ及びフランス式円窯、松風式角窯等が採用された。

四十三年（一九一〇）には絵具専門店の創業があり、又、原料専門工場である京都陶磁器精良合資会社（五条橋東六丁目）及び四十四年には日本陶料株式会社（資本金二五万円、馬町東山通西入）が設立され、原料面における業界多年の要望が適えられた。

こうして、原料絵具の入手が容易となり、窯の大型化の傾向は従来の自家製品のみを焼成する小型窯の改廃となり、又家内工業的生産様式のもの

たらず結果として、共同窯、及び貸窯の制度がはじめられた。

二十六年には帝室技芸員として陶業界からはじめて清風与平が推挙され、二十九年には宮川香山があげられる等業界の信望と地位を高めた。

以上京都陶業界の主な動きを概説したが、これらの諸点については項を改めて詳述することとし、ここに二、三の文献より抜萃した事項を参考としてつぎに掲げる。

〔余 録 5〕

流 行 の 変 遷

明治三十年頃の「京都陶磁器沿革」という寫本の一節（原文のまま）

陶磁器ノ流行ノ変遷及需要ヲ始メタル年度。

古来ニ於ケル流行物ノ変遷及年度ハ知ルニ由ナシト雖モ京都ニアリテハ陶磁器ノ多クハ茶器飲食器及日用品等ニシテ裝飾品ノ如キハ僅少ニスギザリシガ明治初年ノ頃ヨリ海外輸出ノ途開ケ裝飾品ノ製品盛ントナリ随テ画様モ亦大ニ改良ヲナシタリ明治四、五年頃ニアリテハ内地向彩画ニハ花鳥人物其他能、舞、等流行シ同七年ノ頃ニハ輸出品ニハ「ヲシチ」（鴛鴦千鳥ノ画）ト唱フル二人図大ニ流行シ亦画様ハ秋草花鳥ノ類ナリ明治九年頃ニ至リ粟田陶器ニ唐人物二人位ヲ画キ金紗子ヲ振リタルモノ大ニ世人ノ喝采ヲ得タリト同十三年ノ頃磁器染付物ニハ急須煎茶盃類ノ形状異風ニシテ草花殊ニ蘭ヲ画キシモノ販路宜シカリシ又金付物茶器類大ニ流行シ常ニ品物払底ニテ注文ノ半数ダモ応スル事能ハサリシ又陶器ニアリテハ安南写シニシテ其形状ハ撫形寄角ニテ三ツ入子大ニ流行ス次テ十八、九年ニ至リ急須煎茶湯冷シノ三ツ揃水金ヲ用ヒシ盛金物及土瓶類流行セリ全廿五年頃ヨリ袋口総付形ノ花瓶盛シニ輸出セラレ今尚其跡ヲ絶タズ

抑水金ハ明治九年ニ初メテ輸入セリト雖火度ニ適セサルト使用ニ馴レサルヨリ遂ニ用ヒサリシカ廿三年ニ再ヒ輸入以來漸次使用ニ練熟シ水金物一時流行ヲ来セシモ全七年頃ヨリ和絵具ヲ好ム傾向ヲ生シ上等品ニハ用ヒザルニ至リ稍退歩セリ目下流行向ハ振リ地花鳥模様等ナリ

因ニ記ス明治五、六年ノ頃ヨリ本邦陶磁器ノ外人ノ嗜好ニ適シ漸次輸出ノ途盛ニ赴クヤ画工ハ尤モ彩画ニ心ヲ用ヒ全廿一年ニ画工生徒ヲ奨励スルタメ図案会ヲ行ヒ次テ廿六年ニ応用美術ノ共進会ヲ開キテ之レカ發達ヲ計リ常ニ流行ニ後レサランヲ務メタリ而シテ最近（明治廿九年）

ノ調査ニヨリ陶磁器用途ノ種別ヲ示サハ概ネ左ノ如シ

種類	数量	金額
装飾品	一〇〇、〇〇〇個	一六〇、〇〇〇円
日用品	一、〇〇〇、〇〇〇個	七〇、〇〇〇円
文房具	五〇、〇〇〇個	七〇、〇〇〇円
翫弄品	二、〇〇〇、〇〇〇個	五〇、〇〇〇円
雑品	三、一八六、七〇〇個	六〇、〇〇〇円

〔余録 6〕

当時の業者

明治二十八年京都市編纂「京華要誌」上巻によれば京都有名陶磁器及び瓦工業を次のように記述している。

陶器製造	紀伊郡深草村字福稲	京都陶器株式会社
栗田焼製造	下京区三条白川橋東三丁目	錦光山 宗兵衛
同	同 白川筋三条下ル	安田 源七
清水焼陶器	下京区馬町道本町東三丁目	沢吉 吉岡 吉兵衛
栗田焼陶磁器	同 五条橋東六丁目	丹波屋 西田 伊太郎
同	同 清水坂一丁目	安田 福造
清水焼陶磁器	同 五条通大和大路角	近利 平岡 利助
瓦製造	同 大仏東瓦町	日比屋 田中 卯兵衛
同	同 大仏本瓦町	西彦 西村 彦右衛門

〔余録 7〕

京都陶磁器生産高（京都市調査）

註 (1) 窯業協会雑誌第一四四、一五三号による。
(2) 本表は統計資料中の京都市調査と数字が異なるのでこゝに抽出、挿入したもの。

年次	製造戸数	本窯	素焼窯	錦窯	職工数	製造価格
明治三十一年	—	—	—	—	—	三六六、五六三円
三十二年	—	—	—	—	—	五二八、二一一円
三十三年	—	—	—	—	—	七〇五、三三九円
三十四年	—	—	—	—	—	五二六、〇五一円
三十五年	—	—	—	—	—	六四八、二六八円
三十六年	二一〇戸 (二四三間)	—	一七二基	二四三?	五七二(男四五二) 女一二〇	六六六、六六六円
三十七年	一九六戸 (二四三間)	—	一七四基	一〇二	六七三(男五〇一) 女一七二	六一〇、八〇九円
四十五年	二三五戸 (販売業者二二〇)	—	—	—	一、一六〇(男八三三) 女三三〇	一、三六二、八〇四円 (内地向五七九、四四〇二) (輸出向七八三、四〇二二)

註、三十七年度は内地向不況で三十六年に比し約四〇%の減少であったが輸出向は逆に好況であった。

第二節 栗田の発展

明治維新、東京遷都と、不況にあえぐ京都陶磁器業界に、好況の灯を点じたものは、実に栗田焼の輸出面における進出であつた。既に述べたように、江戸後半期の栗田焼の製造業者は明和七年（一七七〇）では十九戸、明治五年（一八七二）には十二戸といわれ、衰退の一路を辿り、現状を維持するのが漸くの状況であつた。

この不況の栗田が、明治一〇年から二〇年代に亘つて、急発展をとげたことは正に刮目に値することである。しばらく私達はこの栗田の経過に

つき、先人の口伝、記録、遺跡等をさぐつてみたいと思う。

明治維新を境として、京都でも外国貿易の発展が期待されるようになった。当時栗田には六世、錦光山宗兵衛あり、専ら輸出品の製造に心掛け、従来の栗田焼に顔料の新法を採用して、外人の嗜好に応じた加工品を焼成し、又、帶山与兵衛等も、雲錦、山水等を華麗な彩画をもつて着彩して神戸の商館と交渉をはじめた。これにより、欧州人、サタン等をはじめ、直接錦光山等に注文する者も増え、同六、七年頃より、花瓶、水指、香炉等に栗田陶器の販路は大いに拡大された。即ち、明治四年京都府陶磁器生産額は九万円でありこの中、輸出は約三万円で、約三〇%を占めたにすぎなかったのが、八年には六七%、九年の米国のフィラデルフィア博覧会を機として一層伸長し、(同十一年には栗田での輸出は九〇%)好況の十二年には生産額、五〇万五千円、その中輸出は三六万四千円となり約七二%を占め、輸出の占める比率は急速に高まつていった。

但し、この盛大な輸出ブームも、生産過剰と粗製濫造を招き、更に海外市況の不振と、国内不景気の影響により、十四年から十八年頃に亘つては、販売価格の低下、滞貨の累積をきたした。

例えば十四年の全国陶磁器輸出額七十一万一千円が、十七年には五十二万五千円に低下し、京都においても、十三年の輸出額三八万九千円が、十七年には二万二千円と約四三%の低下を示していると共に、内需品は僅かに三万九千円しか売れておらず、(金額は何れも「京都府著名物産調」による)京都でも栗田は非常な不景気にあえいだことと思われる。

栗田はこの不況に際し、その因つてきたる原因を反省し、徹底的に、これが打開策を講ずべきであつたにもかかわらず、後に至つて僅かに回復した市況に満足して、その処置と研究を怠つたため、大正末期から昭和初年にかけて、遂に栗田陶業地の壊滅を招来し、僅かに遺跡と、廃窯が一基、草むす裏地に残存する迄に至つた、其遠因、否素因がここにあつたのではなからうか。

それはさておき、栗田不振の原因としては前述の海外、国内の不況がその根元であるとしても、次の事は看過出来ない事情であると思考せられる。

それは、端的にいつて、海外需要の変化に応ずる態勢の採られなかつたことである。例えば、愛知、岐阜方面では十一年以降、日用食器の生産に乗出し、二十二年頃にかけて、輸出の急増を続けている反面、栗田では、当初装飾品、玩弄品を中心として、急発展をとげてきたのに安心をして、その後の需要の変化にもかかわらず、相変わらず従来の生産を続けてきたことである。

もつとも、その後においても、装飾用品(従来の形態、彩画による)の需要は伸長の度合こそ低下したが、依然相当の額に達したことは事実であり、このときの新しい需要の変化に応ずる態勢に切りかえられなかつたことが、是か否であつたかは、軽々と判断することは出来ないが、とにかく、この点が、京都に長く培われた、伝統産業の特質ともいえるし又限界を示しているとも、いえるのではなからうか。

当時の栗田・清水の生産及び輸出額は殆んど、その資料がなく、適確に把握することは困難であるが、明治十六年、京都府勸業課の諮問による答申書「都下商工業の現況調査書」(京都商工会議所史所載)がある。この調査書は明治十三年を根拠とし、十四、五年及び十六年十二月の状況につき調査し、商工衰微の原因、実況及びこれが恢復の方法を記したものである。

これによると陶磁器生産額として

	明治十三年	同 十四年	同 十五年
製造 概 高	三〇万円	三〇万円	三〇万円
売 捌 概 高	三〇万円	三〇万円	一五万円

とあり、又海外輸出品として次の記録がある。

	明治十三年	同 十四年	同 十五年
栗田陶器並七宝類	九九、二八〇円	九一、〇〇〇円	七二、七〇〇円
清水五条坂焼陶器	四五、〇〇〇円	五〇、〇〇〇円	三五、〇〇〇円

とあるが、京都府著名物産調べによる生産総額、輸出総額とは相当の相違があり、栗田清水の地区別内訳については、これ以外に資料がないので、概ね正しいものと推定すれば、栗田焼の輸出の隆盛を察することができる。

註、明治十五年京都府重要物産輸出品として、扇子並に团扇、六万七千円、繡物並屏風類八万円等がある。

明治二十五年頃の栗田の状況を見ると、やはり京都陶業界では勿論、本邦陶業界においても極めて高い地位を占めている。京都府著名物産調べによれば、同年の輸出の好況を反映した京都府の陶磁器の生産は、五十九万七千円、内地向一四万三千円、輸出四万五千円を記録し、佐賀県について、全国で四番目に位置している。又この年における栗田の陶磁器・清水陶磁器の生産を比較すれば、総数にては前記数字と符合しないが、栗田焼製造価格は一〇万一千円、清水焼一九万二千円(府勸業統計報告)を示している。これらの生産は、清水においては、相変わらず小規模手工業生

産により、栗田においては大規模、少数経営への集中により、僅々十業者内外の製造業者によつて生産されていることは、注目に値することである。

栗田、清水の生産額は次の通りである。

栗田及清水陶磁器業者概況表

年次	栗田陶磁器業			清水陶磁器業		
	戸数	職工数	産額	戸数	職工数	産額
明治十九年	一二戸	二八二人	七三千元	五一戸	一七三人	三〇千元
〃 二〇〃	一二	二八五	八一	五八	二〇三	九八
〃 二一〃	一五	二九〇	九七	五九	二〇〇	六七
〃 二二〃	一七	三一二	一二	五八	二〇〇	一〇一
〃 二三〃	一六	二八三	八六	五八	一九〇	六八
〃 二四〃						
〃 二五〃			一〇一			一九二
〃 二六〃	一一	三七五	八九	六二	四〇八	二一三

註、明治十九年—二十三年は京都府統計、同二十五、二十六年は京都市編「京華要誌」による。

栗田の工場事情

明治二十年代の栗田の繁栄を招来し、又は之を支えた代表的業界人としては錦光山宗兵衛、安田源七、帶山与兵衛、初代伊東陶山、丹山陸郎、宝山文蔵等がある。そのうち、錦光山宗兵衛の主宰した、錦光山工場（現在の東山区三条通白川橋東三丁目、夷町、同柚木町に亘り工場建物面積五、五〇〇坪）はまだ手工芸的技術段階にあつたが、本窯三基、錦窯二〇、職工二百五人（明治二十三年）を有し、生産額も年間拾万円（明治二十二年一月—十二月）同四十一年四五万円と称されている。又、安田、帶山工場等でも職工四十人以上を雇傭し、一貫した分業制手工業の形態をとつていた。

当時錦光山工場で使用した原料はつぎのようであつた。（明治二十五年）

原料土、大日土（三条蹴上附近）岡崎土（現、左京区岡崎附近）信樂土、白絵土（滋賀県、甲賀郡）

釉薬、天草石、禱灰—長崎県産、生灰—自家製

薪材、松木

彩色顔料、金銀泥—京都製西洋絵具—英国及仏国の輸入品

又同二十五年の錦光山「出品解説書」によると、その製造方法を次のように説明している。

「原土四品ヲ調和シ、之レヲ水簾シ以テ羽二重ニテ篩ヒ泥トナシ、是ヲ板上ニ盛り日光ニテ乾カス、使用スル処ノ加減ニテ、一ノ玉トシテ精練為シ、施盤上ニテ適意ノ如ク製作シ篋ヲ以テ造坯ヲ補ヒ、而シテ之レヲ素焼窯ニ入レ焼干シ後、復、前記ノ釉薬ヲ施シ本焼窯ニ附ス、松木ヲ以テ燐火スル凡四十時間ニシテ白色光沢ノ極ニ至レバ火ヲ収ム、冷テ後、光沢上の水文—きれつ、かんにゆう—ヲ結ブ、彩画顔料ヲ為シテ更ニ錦窯ニテ焼上グ」

とあり、前述の通り、技術水準は、依然、手工芸の域を出ていない。（京都府下人物誌明治二十四年参考）

左に明治二〇年代における、栗田を代表する陶業者の業態を示す。

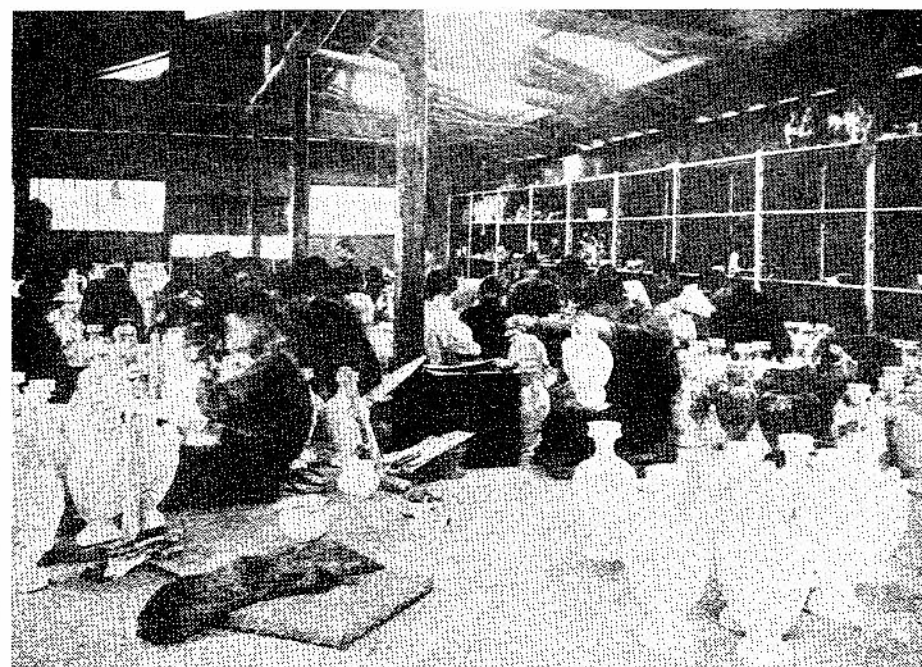
明治二十年代栗田陶器製造所

業者名	ロクロ	手ロクロ	素焼窯	本窯	錦窯	職工数	年産額	創業	資本金	所在地
錦光山宗兵衛	二〇台	五〇台	五基	三基	二〇基	二〇五人	六〇、〇〇〇円	正保二	三万円	下京区三条通白川橋東三丁目夷町
安田源七	一五	三五	四	二	一五	六五	五〇、〇〇〇		五千	下京区白川筋三条南入梅宮町
帶山与兵衛	八	一五	二	一	五	三二	一四、三〇〇	延保三	七千	下京区三条白川橋東五丁目東町
伊東陶山	四	六	一	〇	五	一四	四、〇〇〇	慶応三		下京区祇園町
計	四戸	四七	一〇六	一二	六	四五	三一六			

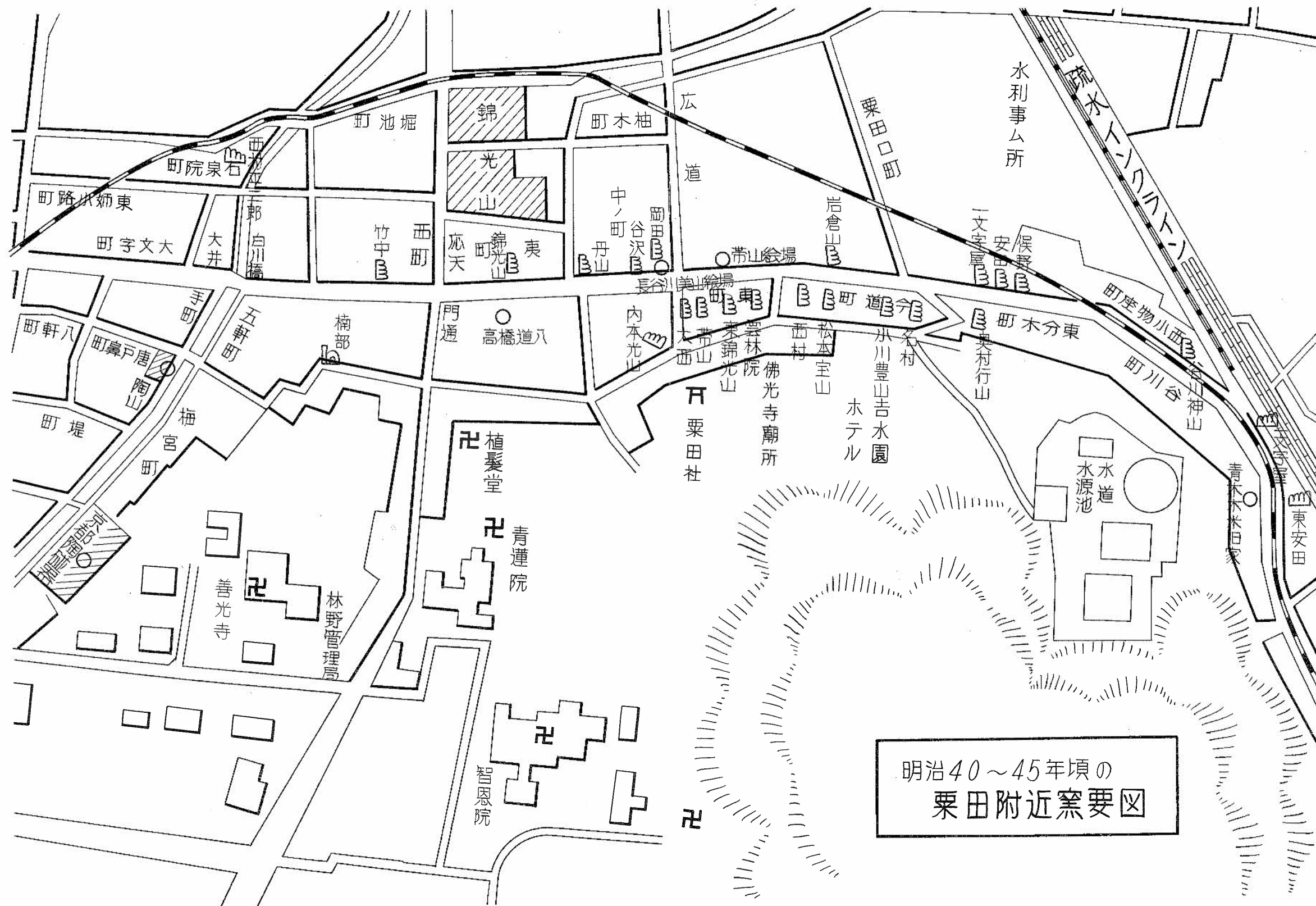
註、生産額は明治二十二年度、職工数は明治二十三年の府統計書によるが伊東工場のみは明治三十七年の記録である。



真清水藏六筆 ロクロ造りの図



明治末期の錦光山絵付工場



明治40～45年頃の
粟田附近案内図

この時代の我国輸取出取扱品は、瀬戸素地に絵付したものや、栗田焼、九谷焼、薩摩焼等があり、栗田（十八年頃）では花瓶、ランプ台、七宝焼、コーヒ具、茶器等の盛金もの、清水では、ランプ台、コーヒ具、花瓶等の盛金したものを輸出しており、何れも、装飾品玩弄品を主とした。京都の人、丹山陸郎がオーストリアより持ち帰った水金は、（明治七年）栗田焼輸出に大きな力を添え、その使用額も十七、八年頃は年間五、六万円といわれ、金銀五彩の華麗な錦欄手陶器等に盛んに使用された。

次に参考までに京都府統計書による明治四十一年の栗田地区の工場を示すと次の通りである。

工場名	所在地	創業	主要製品
京都陶磁器合資会社	三条通白川橋東六丁目	明治三十九年	輸向陶磁器（主として栗田焼）
錦光山	三条通白川橋東三丁目	正保二年	栗田焼陶器
伊東陶山	三条南裏白川筋	慶応三年	栗田陶器及磁器
楠部陶器工場	三条白川橋東入	明治二十一年	栗田陶器、上絵付
小川豊山製陶所	三条白川橋東五丁目	明治二十八年	栗田陶器、磁器

以上、大凡の栗田陶器の消長を述べたが、要するに栗田焼は維新以来、二十二年頃迄は、伸長の時期であり、その後においては、銀両相場の変動、輸出需要品の転換、米国市場へのドイツ製品の大巾進出、輸出陶磁器中の王座に上つて来た日用食器の生産を主とする愛知、岐阜地方の大巾進出等に圧迫され、その伸長率も鈍化し、時に減退することもある。清水磁器は日露戦役後大巾に伸びている。しかし生産額中、貿易を主としてきたので内需の減退による不景気の際でも割合に生産は順調で、明治四〇年の栗田陶器は清水磁器のほぼ、倍額の生産をしている。やがて内地向磁器の需要増大につれ、清水磁器の生産は急進し、栗田は次第にその首位を清水にゆずる傾向を示し、次の大正時代に入るや一層その開きを大にし、やがて栗田、凋落の時期に入つてゆく。

備考 この間の事情について明治二十七年一月の大本窯業協会雑誌第十八号はつぎのように所載している。

栗田陶器商の自然淘汰

京都栗田の陶器は去る二十一年―二十三年頃は非常の盛況を呈し、其の利多かりしを以て大に同業者の数を増し、些細の資本を以て粗悪の品を製出し、価の廉なるを競争するに至り、真正の当業者は迷惑一方ならざりしが去る二十四年以來其商勢漸く振はざるにより彼の小商人輩は資本の

供給に堪へず近來続々閉店する由。

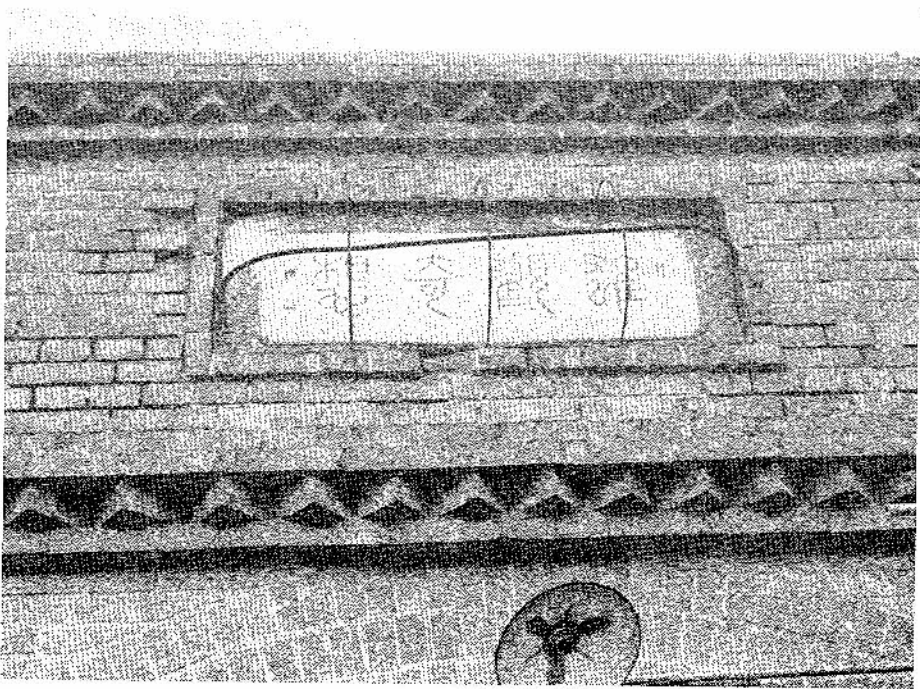
第三節 五条清水の動き

栗田の維新後の発展についてはその概略を述べてきたので、これに対応する五条清水の動きを採つて見よう。

五条清水では、宝永（一七〇四）正徳（一七三五）頃までは窯数も僅か三基位と伝えられていたのに、文化年間（一八〇四—一八一四）磁器製造がはじめられてから天保、弘化年間と次第に窯数も増し、明治五年には二一基、四十五人の製造業者を数えるようになり、又尾州（愛知）加賀（石川）江州（滋賀）から移住する工人も多く、新興陶業地としての活気にあふれてきた。

明治五、六年頃から栗田が輸出面で飛躍的な発展をとげ、十年から二十年代にかけて、完全に輸出向けに転換をみせたので、五条清水の生産者もこの活況に刺激され、輸出の一環を荷うべく生産に乗り出すものもあつた。しかし、輸取引の当初は、外人の好みに暗く、外人の希望により、その指定し又は提供するデザインにより生産をするという状態で、製品も従来 of 玩具の類が多かつたが、十七、十八年頃に至つて漸く積極的に研究、製作する態勢に切りかえられた。

例えば三代、清水六兵衛（文政五年（一八二二）—明治十六年（一八八三））等は時の植村知事の激励に応え、清水焼の発展には、輸出が要件であるとして、コーヒセット、置物、裝飾用皿を作つて新しい時代の推移にあわせるよう努力を重ねた。



（作兵衛山陶額）
（本窯陶額）

明治二十三年四月琵琶湖疏水完成当時三条蹴上インクラインの下を沿るトンネルの東西両面に掲げられた陶額、東口は破損して殆んど形を止めず。これは西入口の額

この頃に前述の植村知事の有力な後援により、清水五条最大の施設を誇つた幹山伝七の工場が竣工した。（東山区、産寧坂興正寺の北隣り）その敷地は約三千坪で約六十人の職工を雇傭し、大型焼成装置のため瀬戸式円窯を築き、宮内省用達の洋食器等も焼いた。これが京都における円窯の嚆矢である。

幹山工場は優秀な人材を集めて最高級品を製出して、その名は内外に喧伝され、同十四、五年には直輸出を計画、同二十年には幹山陶器会社（資本金五万円）を創立した。この工場の詳細は別稿幹山伝七に詳述する。

又、明治十九年の京都府勸業統計報告によれば、清水では清風、道八、幹山、六兵衛の活躍があげられその生産額は二万九千円といわれている。

同十八年清水地区を中心とする異組（問屋、製造業者、絵付業者により構成）の調査によれば清水地区のこれら業者は一九七軒、製造業者の雇傭職工一五一人といわれ、の中には幹山工場の職工を含んでいるので、大概は個人又は零細工場であり、相変らず茶碗、徳利、鉢、土瓶といった在来品の生産を続けていたので、二、三の例外を除けば、資本金もわずか、十三年頃からの国内不況と、競争の激化で、値下りを続け、忽ち悲惨な状態となり、弘化、嘉永年代には一戸毎に窯を持ち、且つ月二回の焼立をしたといわれていたのに、この不況に際会したときは、十業者位で漸く月一回の焼立をなすこともあつたという位である。

同十八年の陶磁器取調書によると次表の如く、価格はこの二年間に約三割の減退となり、営業者は半減し、その深刻な不況の影響を語っている。

	明治十四年	同十五年	同十六年
生産個数	二、七六八、〇〇〇ヶ	二、二六八、四〇〇ヶ	二、〇三三、二〇〇ヶ
生産価格	七〇、〇〇〇円	五六、八〇〇円	五〇、八〇〇円
営業者	一五〇	九〇	七五

この不況の挽回策として京都陶磁器同業組合の結成や、陶器館の設立、「輸出の道を構じ、貿易を盛大ならしめる」研究会の開催と対策が構じられた。これらの事項は後述することとする。

又同十八年五条清水の生産規模について「明治二十年前後の京都陶磁器等―鎌田」の記するところを見ると、清水の代表的陶工の生産は次表の

ようなものであつた。

明治十八年五條清水の生産規模

業 者 名	礎臼	ロクロ	素焼窯	本窯	錦窯	職工数	販 売 額	摘 要
清水六兵衛	三	五	一	一	二	五	明治十五年 二、四五〇円 同 十六年 一、〇五〇円	
耕山愛太郎	一	〇	一	一	一	五	三、三〇〇	主として化学用
小川卯之助	一	四	一	△	一	一	七二五	
高橋道人	三	五	一	一	二	六	七九五	
浅見五郎介	一	四	一	△	一	二	三八〇	
喜多見 安之助	一	五	一	△	一	二	四二〇	
沢村 東 佐	一	三	二	△	一	二	三六〇	
長谷川寅介	一	二	一	一	一	一	二八六	
山本辰之助	一	二	一	△	一	一	二七〇	
和 氣 平 吉	一	四	一	一	一	一	七六〇	
奥村安太郎	一	二	△	△	一	一	五二〇	
中村新助	一	二	△	△	三	一	六八〇	
和氣平兵衛	一	三	一	△	二	一	二二五	
真清水 寿太郎	二	二	一	△	一	一	一六五	

註 1、明治二十年鎌田久明著、京都の陶磁器業、及明治十八年「出品解説」により作成。

2、△印は組合窯又は他の所有窯を使用するものを示す。

この表の示すように最大のもので職人、徒弟は五、六人、販売額三千円という、小規模経営であり、栗田の生産規模と比較すると格段の相違があつた。

又当時の問屋は五條一帯に集中し、小島利平、酒見外治、谷口、西村、平岡万珠堂、岡田眺山、西田伊太郎（貿易）安田福造等の名があげられ

いる。

明治四十年、京都府統計書による五条、清水の主要工場には次のようなものがある。

名 称	主要製品	所 在 地	創 業	職工数
耕山愛太郎	化学、工業用	(当時下京区) 五条橋東四丁目	明治年間	一二
文 濟 工 場	陶 磁 器	五条橋東六丁目	明治六年	一五
竹 泉 工 場	〃	〃	明治十八年	一五
石田工場	主として電磁器	妙法院前側町	安政三年	

〔余 録 8〕

五条坂から清水坂

明治初期頃の五条坂清水坂辺の風景を古老はこう語っている。

西大谷の北を清水坂の方へ進む道は全くの竹藪道で途中に安祥院（日限地藏）があるだけで両側から丈余の竹が生い重なり、まるで竹のトンネルのようで屋でも暗い淋しい道であつた。それに西大谷の東白糸町附近（現在の陶磁器会館辺）は貧民窟とでもいうべきバラック小屋が在つて、そこからきたない服装をした子供達が道に出て物乞いなどするので気味の悪い細道であつた。それでも其鬱蒼とした竹藪は珍しく外人は此処をバンブー、ロード、と称して一種の名所としていたとの事である。

其竹藪道の五条坂を登つて三年坂（産寧坂）に出ると、其処にひょうたん屋（瓢箪屋）があつた、この店も元は猿や鳥を飼つて小さな動物園式の店だつたのが、瓢箪屋（現在田中豊山堂）と発展したのだとのことである。七味唐からしの七味屋も其頃小さな店を出していたに過ぎずそれから東には登窯が一、二あつたとのこと、これは後、松風の窯となつた鬼頭嘉十郎の窯であり、三年坂の下には幹山伝七の窯があつて後、井上柏山の窯となつたようである。

今は日々幾千万の観光客を迎える清水寺も明治の始めはバンブー、ロードをこわごわ登つて参詣する小数の信者達の参詣道に過ぎなかつたのである。清水新道なども竹藪中の野道に過ぎず、ただ鳥辺山へ通じる道は其頃も墓参者等の通う道として清水寺への裏道の一つであつたとの事

である。

第四節 京都陶磁器同業組合

江戸時代以来の同業者団体の組織は、明治維新により一時瓦解するに至った。即ち慶応三年十二月、市中取締役所は諸仲間に対し、諸株存置の主旨を明らかにしたが、明治元年四月、京都に商法司が設置せられ、その下に、京都商法会所を置き、同年十二月京都府は、諸商業仲間別帳を会所に提出せしめ、諸株の廃止を宣して、商売仲間を結成せしめ、商法会所は、商法仲間に新鑑札を賦与した。

同二年三月商法司の廃止と共に、商法会所も廃され、これらの営業取締は、京都府勧業方に移った。

他方同二年七月、京都開商会社（はじめ、京都通商会社）が設立され、商売仲間の統轄と営業取締りを行うこととなった。

その後、政府、京都府は商社の設立を勧奨し、三年六月までに、一二四の商社が設立されている。

この商社とは組合のことで、同業者の団結によつて、営業の発展を計るためであつたが、この商社は結局従来の株仲間、札の仲間が、一時商社と名を変えたのに過ぎなかつたので、再び株仲間的な弊害を生ずるに至つた。

ここにおいて、京都府は四年九月、日用必需品関係の商社開放に関する告諭を發したので、一部の業種を除き、同業者団体の結合は絶たれてしまつた。

然るに商社開放の結果、同業者の孤立的営業は再び弊害を生じ、営業不振の原因となつてきた。

京都府では、その救済のため、明治十六年四月、京都市在住、商工業者を促して、組合設立をすすめることとなり、京都府達が發せられ、続いて十八年四月農商務省の令達に基づき、京都府は同業組合準則を制定し、その標準を示した。

このようにして京都陶業界も他の産業同様右往左往したが、同十七年組合設立の機運に向い、清風与平が創立委員に推され、同十九年には京都府を、乾、坤、巽、艮の四組合に分ち、五条清水は巽組合、栗田は艮組合に属することとなつた。

巽組合は、五条橋東五丁目に、陶磁器蒐集場を創設し、諸陶磁器の見本を陳列して、一般の參觀に供し、又二十一、三年には、組合品評会が開かれるなど、業界の振興策が打出されている。

明治二十六年四月、巽組合長、井上松兵衛は当時陶料（天草石）の供給は大阪商人によつたため、原石に、不良品混入して、製品の失敗、品質低下等の、思わぬ損失をうけることが度々だつたので、自ら天草島に赴き、同地の山主、上田松彦等と交渉し有利な直接購入の取引契約を結び、業者の利益と製品の向上を計る等、特筆すべき業績をあげた。

これより先、二十五年七月、府令第四十六号により制定された「同業組合取締規則」により、重要工産物の発達が期せられたが、陶磁器関係では、栗田の京都長組陶器商工業（製陶、陶画工、問屋）と、五条清水方面の京都巽組陶磁器商工業が、本規則の適用を受ける業種として指定された。同規則、第二条によれば

「前条の営業者は工作の弊習を矯正し、営業の秩序を整理するの目的を以て、種類毎に組合を設け、之に加入すべし」とあり、本規則制定の目的はここにあつた訳であり、この二組合は、京都の重要物産七組合のうちに数えられ、同業者に対し、強制加入力を有する強力な組合であつたのである。

この府令により設立せられた京都陶磁器組合の経過の概要は次の通りである。

大日本窯業協会雑誌第八号（明治廿六年四月）より

（京都通信。飛鳥井孝太郎—京都通信員）

京都陶磁器商工巽組合は明治十六年四月甲第十九号の布達に基づき明治十七年五月廿日、府の認可を受け設立、十八年四月甲第五〇号の同業組合準則により、同十九年五月規約を改正し、ついで明治廿五年七月廿八日、同業組合規則の発布により、九月廿八日、府の認可を受け十月選挙せられた役員は次の通り。

頭 取 井上松兵衛

取締役 清風与平 谷口長次郎 松風嘉定 宮川治助 平岡利助 遠藤平橘
高橋道八 宇野幸治郎 喜多見 安之助

会議員

製造部 松風嘉定 木村弥兵衛 高橋道八 清風与平 小川卯之助 喜多見 安之助

宇野 仁松	石川 栄助	清水 六兵衛
売買部	平岡 利助	小島 利兵衛
	酒見 外治	宮川 卯一
		田村 宇兵衛
画工部	長谷川 信次郎	石田 佐太郎

この組合の目的実行の方法は左の通りに記されている。

当組合は同業者共同の精神を養成し、組合員の地位を増進し営業上の気脈を通し製品を改良し売買信用を保持するを以て目的となし、其實行方法を下条に掲ぐ。

- 第一 当組合の成立に妨害を及ぼすべき所業あることを発見するときはその産地の組合へ矯正を求むること。
- 第二 内外陶磁器製産地並に原料の産地若くは市場と通信を交換し又は実地視察のため組合員及伝習生を派遣すること。
- 第三 製品の改良を誘導するため、組合員に限り発明品専売を保護し、競技、品評の両会を開設する事。
- 第四 隔月一回取締所に於て同業者の随意集談会を開き技術及売買に関する営業上の得失を研究すること。
- 第五 組合員各自の取引は特に信実を旨とし、約束の条件を背くべからず。
- 第六 物品代価の不払又は不当値引をなす者に対し組合員一切取引をなさざる事。
- 第七 組合員は互に他の記号を記入することを禁ず
- 第八 備主と職工に関する規定を設くる事
- 第九 授業師と徒弟に関する規定を設くる事
- 第十 内外標本を集むる事
- 第十一 聯合黨取締を規定する事
- 第十二 備主相互に恣に他の職工を使用し又は直接間接に勧誘し自己若しくは他家へ転せしめ、ために自己又は囑托者に私利を営ましめ前備主

に害を与ふか如きことをなすべからず

第十三 製品の改良販路拡張を図らんため一の陶器館を設立し当組合内産出の諸陶磁器標本を普く蒐集し衆庶の縦覧に備へ世人需用の便宜に供し各相励み製品の善良に注意を加へしむべし

第十四 組合員新機軸精巧品及有益便利の物品又は製造改良法を発明するときは、役員会の決議を以て、当組合内に於て、一ヶ年以上五ヶ年以下の特製権若しくは賞与を与ふべし

右特製認可を与へたるときは之れを普く組合員一般に布告し且見本を取締所に備へ置き組合員の便覧を得べし。

本組合員は其特製権期限中は之れを模造模擬することを得ず。

但本文提出品は其種類毎に保証金一元を現品に相添へ差出すべし、若し提出品旧式あるときは保証金を没収するものとす。

(京都市陶磁器商工組合)

同二十七年になつて、同業組合に関する府令が発令せられ、良、巽の両組合を廃し、新たに、京都市陶磁器商工組合が設立されるに至つた。

二十九年には、同組合に改正が加えられ、伊東陶山を頭取とし、業者の宿弊を改め、職工の悪習慣を是正する等、業界の面目を一新することに努めてゐる。

(京都陶磁器商工同業組合)

同三十三年三月、法律第三五号、重要物産同業組合法が発せられ、旧組合は、この法律による組合と見なされ、同年、京都陶磁器商工同業組合として商工省の認可を受けて発足している。

註、この組合については大正四年の記録があり、これによると組合の所在地は下京区(現東山区)広道通り五条上ル梅林町五七六、設立は明治三十三年二月七日地区は京都市一円と、紀伊郡深草村、字福稲(現伏見区深草福稲)を範圍とし、組合員には、陶磁器製造(二二五)販売業(二二三)が加入し組合長は錦光山宗兵衛、年間経費は三十七万四千二百円と記されている。

この組合は、設立以来、与論を動かし、市立京都陶磁器試験場を国立陶磁器試験所とする機運を助成し、又、従来の手工業的性格に、工業的組織をとり入れ、輸出奨励に力を入れてその実績を向上し、技工奨励会、奨陶会を設けて、研究、研鑽の実をあげる等、業界のため顕著な功績を

〔余録 9〕

五二 会

明治二十五年頃、我国貿易の振興をはかり、業者の発展を計るため、染物、織物、陶器、金属、漆器、製紙、雑貨、敷物、彫刻等の有力者を集めて、五二会を設立、東京に中央本部をおき、前田正名が本部監督、京都本部長に内貴甚三郎、陶磁器部会長に四代清水六兵衛(明治二十七年)、初代伊東陶山(明治二十九年)等の名があり、度々、講演会、研究会、展覧会等を開いて産業の発展を助成している。陶磁器部の会員には次の人々の名が見える。

伊東陶山、井上松兵衛、石田佐吉郎、長谷川信次郎、西田伊太郎、東城吉彦、吉岡吉兵衛、横山傳治、丹山陸郎、高橋道八、谷口長治郎、谷口竹三郎、奥村玄治郎、奥村安太郎、岡本辨之助、小川卯之助、中川忠治郎、宇野幸治郎、安田福藏、安田源七、松田六平、小西徳之介、小岩藤吉、小嶋利兵衛、江川利一、海老名敬介、遠藤平橋、酒見外治、佐藤友太郎、錦光山宗兵衛、木村弥衛、喜多見安之助、宮川治助、清水六兵衛、松風嘉定、平木直次郎、平岡利介、清風与平

第五節 ワグネル

ゴットフリート・ワグネル(一八三一—一八九二(明治二十五年)) 出身地、独乙ハノーベル

明治の前半、我国の陶磁器界、及び京都の陶磁器業界の技術進歩に貢献した人として、ワグネルの功績は忘れることができない。明治元年、来日し、同三年には、佐賀藩に招かれて有田の磁器製法を指導し、同六年、オーストリア万国博覧会には政府顧問として、又、九年の米国万国博覧会にも、我が国の工芸品の紹介をして帰朝したところ、翌十年、彼の関係していた文部省所管の大学南校や、勸業寮の試作事業も相ついで廃止され、失意の不遇時代に、京都府は彼を招聘して、同十一年、京都の医学校で理化学を教えるかたわら、土手町にあつた舎密局で化学工芸の指導に当らしめることになった。

舎密局は明治三年、新しい産業の移植、普及のため設けられており、ここで彼が推進した理化学の教育と、近代産業の建設指導とは、地味ではあつたが、決して軽視できないことは、「ワグネル先生追懷集」に「ワグネル博士の一生中、日本にとつて特に貢献の多かつたのは、一八七八年三月から一八八一年八月のはじめまで、三年間京都に滞在した期間であつた」とあり、又、ドイツ、東亜細亜研究協会に、明治二十九年掲載された「ゴットフリート・ワグネル博士追悼録」もこの京都時代を日本における博士の活動につき、貢献の多かつた時期であると記しているのを見ても明らかである。ここに大正十四年京都市博覧会出版協会によるワグネル伝を抜粋することとする。

ワグネル伝抜萃

明治十年には東京に於ける製作学校廃せられ勸業寮の事業も亦停止せられたればワグネル氏は一時官職を失ふこととなりたり。七宝の事業に於て鋭意研究を進めた事は蓋しこの時なるべし。明治十一年には京都府の聘に応じて赴任し、該地の医学校に於て理化学を講演し、舎密局に於ては化学的工芸に関するものを談話して伝習生を養ひ、傍ら陶磁器改良、七宝の着色、珐瑯、硝子、石鹼等の製造方法を実験に施し以て夫々事業の進捗を奨励し、又染色術に於ても指教せるものありしと云ふ。此年勲四等に叙せられ瑞宝章を受けたり、蓋しこれ単に京都に於ける事業奨励に功績ありたるの故に止まらず、維府、費府等内外の博覧会に参与して着々其事務を進捗せられたるもの多きに因るならん。

氏か京都にあるや聖護院門跡内に住み土手町の舎密局に通勤せしが、各種の実業家の質問に対し懇切に指導せり、夜間は読書により調査をなすを常とせしが、機械の利用並に其据付に關しては氏を煩したるもの少からず、京都に於ては旋盤使用法を習得せる人に島津源蔵氏あり、機械の購入並に据付の援助を受けし者に梅津製紙会社あり、東京にも王子製紙所の如き其助けを受けたり。薬品の製造に關し小泉俊太郎氏は其助手となりて習得せる所大なり。ワグネル氏の製作品中舎密局に於て博覧会出品の目的にて製作せし七宝板嵌の朱檀の簞笥は、明治天皇の同局に行啓せられし際献納を命じ給ひ永く御手許に留めさせ給ひしと云う。当時此等の製作に關し職工として実地に従ひし者に前田嘉右衛門と呼ぶ人あり、東京に於てワグネル氏がアーレンス商会の依頼により七宝を作りたる時代より其手足となりて働き、後京都に招かれ舎密局に勤めしが、其後永くワグネル氏の法により七宝陶磁器等の顔料製造に従事せり、現時八十一才(大正十三年頃)の老人なるが当時の状況を語る所によれば、ワグネル氏が七宝を改良せる点は旧来濁濁せる釉を清澄にし美麗なる色彩を作り以て我が七宝界を革新せしなりと。又京都府勸業課に属せる伏見観月橋畔の機械工業所に就ても氏の助言せる所少からず、写真術、石鹼、色素等にも示教せる所多く、京都医学校並に舎密局の研究生に対し常

に講義の要項を版に付して之を授けたり、美術の研究は特に好みたる所にして望月玉泉画伯とは殊に別懇の間柄なりしと云ふ。舎密局の陶磁器実験工場は五条坂に設けられ永楽和全氏当時雇にてワグネル氏の指図により種々の試験をなせり、又陶工入江道仙氏も其伝習を受けしと云う。氏が勤務に当るや極めて精勵にして自宅に於ては喫煙するも舎密局に於ては之を用いしことなかりしと。氏が外出に際し愛犬之に従ひしが当時殆ど唯一の洋犬にして此犬によりてワグネル氏の来訪を知りしと云へり。

同氏の京都に居を占めたるは三ヶ年に止りしが此間教育上に又実業上の進歩改良に尽瘁せられたるは上述の如し。而かも其身多忙なるにも拘らず時の美術家絵画家と往復して本邦美術の真相を探究し、殊に古製作品を多く模写せしめて粉本となし之を貯蔵せり、後年旭焼を創造するや絵画の装飾を施すに当り、凡て該粉本より選抜して用ひたりと云ふ。当時国内に居る他の外国人には古き製作品を購入し之を海外に致して利益を貪る者多々ありたれども、同氏は真に其美術趣味を愛し仮初にも自己の利益に傾斜せず之を模写する為には反つて少なからざる私財を投ぜるならん。嗚呼同氏は学芸を真に尊重する廉潔の士なりき、実に得難き人物たりしなり。

明治十四年京都府は疏水工事の資金を得る為に舎密局を廢せり。當時有志者氏を中心として工業学校を興し從來の事業をも合せて継続せんことを企画したれども遂に成らず、ワグネル氏は再び東京に歸りて大学の教授に任ぜらるることゝなれり（以下省略）

又彼は、京都に来る前、明治十年、内国勸業博覽会に際して、粟田陶器に次のような批評を加え、京都陶磁器に對する深い関心を見せている。「粟田陶器は、粧飾着彩が、草木、花鳥等に限られているが、配合に更に工夫をこらすべきである。又欧州人は、粟田陶器の水裂紋をみて、器質によるものとせず、かえつて瑕瑾であるとして、いやがる風がある。着彩に欧風色料を用いるのはあやまりで、金彩も少し豊盛にすぎるきらいがある」

其の後一旦帰国後、再び来日、同二十五年、東京で歿した。六十一才。

〔余 録 10〕

ワグネルの奥国渡航同行者

明治六年ワグネル博士が率いる奥国博覽会渡航者中に陶器関係者としては

納富介次郎（有田）……陶器製造図説編成兼審査官

川原忠次郎（有田）……陶工、売店売捌係

丹山 陸郎（京都）……同 右

他 二 名

あり、又右のうち納富氏は陶器技術伝習者、川原氏は製陶技術伝習者、丹山氏はギフス模型製法技術伝習者としての記録がある。

尚ワグネル博士明治廿五年一月独乙より再来朝した時ゼーゲル、ケーゲル（三角錐）を将来し実用に供せられた（ゼーゲルの創業は明治十九年）、デビル爐も同時に持帰り我国での使用を見たのである。この一事だけでも先生の我陶業界への貢献の甚大な事がわかる。

ワグネルの死後、その功績を顕彰するため記念事業が計画されたが、時に、第一次世界大戦があり、実現を見ることがなく、大正十三年、万国博覽会参加を記念して記念博覽会が京都で開催され、博士を追慕して京都の岡崎公園、府立図書館前に彼の記念碑が建てられて、その功績をたたえている。

尚昭和十年十二月関係者相計り故ワグネル博士記念事業会を組織し、広く募金を募集し東京大岡山、東京工業大学構内に記念碑を建てて陶筒に君の功績を記して埋没し又ワグネル先生追懷集を編纂して永く君の我国工業界に残した功績を表彰した。

ワグネル博士記念碑

大正十三年京都市に御成婚記念兼万国博覽会参加五十年記念博覽会が計画された、これは最初東京で開催の予定であつたが大正十二年九月の大震災の爲開催不可能となり京都市が引受けて開催したものである。三月から十月迄の会期で盛況を呈した。閉会後其記念事業の一部として我が国が万国博覽会に最初に参加した明治六年のウイン万国博覽会に万般の世話をし、自らウインに関係者を統率出張したワグネル博士の功績を永久に記念する爲、岡崎府立図書館北側に記念碑を建立する事となり、又ワグネル伝を編纂して出版した。

京都府立図書館構内にある「ワグネル」の碑文は次の通りである。

ドクトル、ゴットフリード・ワグネル君は独乙国ハノーベル州の人なり、維新の初、〔明治元年（一八六八）〕我邦に來り、科学を啓導し工芸を

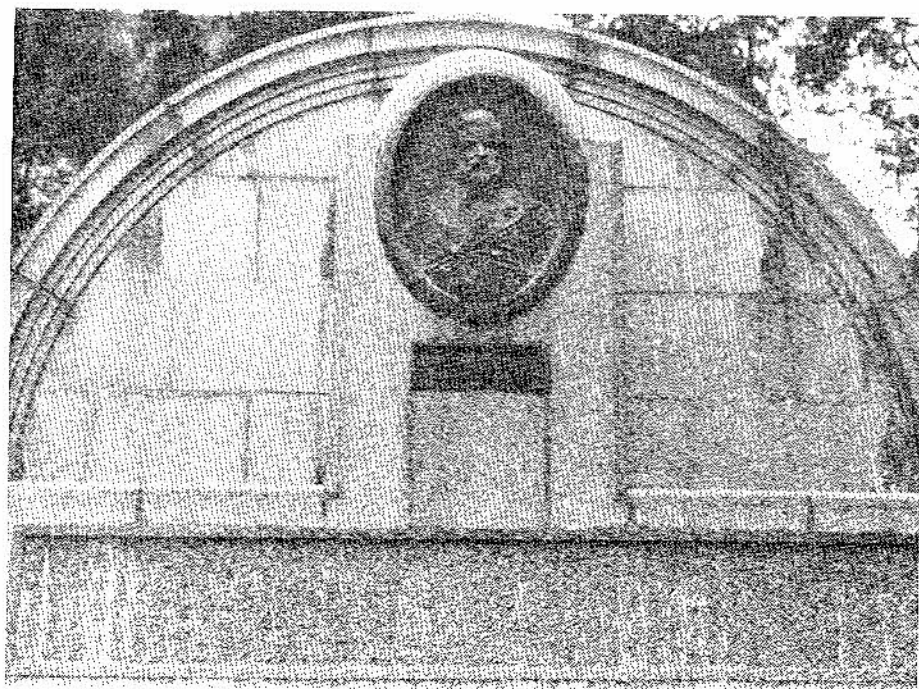
被達すること廿年、殊に本市に於て尤も恩徳あり。明治十一年、君、本府の聘に応じ、来て、理化学を医学校に、化学工芸を舎密局（明治三年京都府勸業場内に設置）に教授し、旁ら陶磁七宝の着彩、瑠璃、玻璃、石鹼、薬物、飲料の製造、色染の改善に及び、講演実習並に施し、人才の造成、産業の指導、功効、彰著、官民永く頼る。

大正十三年本市、東宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加五十年記念博覧会を岡崎公園に開く、初め本邦斯会に参加するや、君、顧問の任を帯びて本市に來り、頗る斡旋する所あり、是に於て市民益々君の功徳を思い、遂に遺容を鑄て貞石に嵌し之を会場の一隅に建之、庶幾はくは、後昆胆仰して長に旧徳を記念せむことを京都市長從三位勲二等馬淵銳太郎誌す。

第六節 京都における最初の窯業教育

京都に於て同志社が陶器学校を經營して居つた事は余り知られていない、それに就ては下記窯業協会雜誌第一号（明治廿五年九月発行）に京都通信として掲載されて居る一文で明であるが又同誌に同校の生徒募集の広告が載つてゐるのは興味ある事で、此処に其広告文を転載する。

尚この同志社ハリス理化学学校陶器科にどんな生徒が入学し又卒業しているかは全く不明であるのは残念である。京焼に関係した人もあるのではないかと思ふ。



ワグネル神（岡崎公園府立図書館北側）

同志社ハリス理化学学校陶器科生徒募集広告

理化学学校陶器科ハ今般二部二分チ一ヲ陶器科トシ一ヲ化学兼陶器科トス陶器科ニ於テハ学理ト實際ニ通スル陶業家ヲ養成シ卒業後直チニ營業ニ就クヲ得セシムルヲ目的トシ尋常普通学ヲ学ビタルモノハ無試験ニテ入学セシム化学兼陶器科ニ於テハ高等ナル化学ヲ教授スルト共ニ窯業ニ関スル学者ヲ養成シ工場長或ハ教員タルニ適セシムルヲ目的トス加之京都ハ有名ナル陶器ノ製産地ナルヲ以テ学生ニ便益ヲ与フルヲ極メテ多シ又タ特ニ陶工或ハ画工タラント欲スル者ヲモ入学セシムルノ制アリ詳細ハ規則書ニ詳ナリ郵券二銭ヲ投セバ送附スベシ

明治廿五年八月

京都市上京区相国寺門前町一番戸

同志社ハリス理化学学校

明治二十五年九月大日本窯業協会誌第卅号

京 都 通 信 （あ か 生 報）

京都における窯業の現況及びその出来事を報告するにさきだち、窯業に関する一般の景況を報告するに大いに利益ありと信ずるを以て

第一 窯業に関する学校

第二 窯業に関する製造場

につき概陳し然る後、或は商況につき或は製造業につき或は名工の言行及びその履歴等につき事に応じ物にふれて記述すべし、然れとも生の近眼なる或は偽をもつて真となし、正を以て仮となすこと多かるべし、読者之を恕せよ。

第一 窯業に関する学校

窯業に関する学校は同志社ハリス理化学学校と京都美術学校の二校にして

京都美術学校は洛東智恵院内にあり、絵画を教授するを主とし且つその応用につき教授し意匠画の如き大に他の技芸学校に比して、その進歩速なれども、単に意匠画を教ゆるのみにして、直接に陶器或は漆器等に画かしむる事をなさず、故に陶業には間接に関係するも直接には然らず、故に此に詳説せず。

同志社ハリス理化学校は洛北、相国寺の門前同志社内に建設せられ、

四八

清水の陶工場には、三、四十分余にして達するを得るの位置にあり。抑もこの理化学校は米国コンネクチカット州新倫敦の紳士デュー、エチ、ハリス氏の義金を基本として設立せしものにして、部門を応用専門部と大学の二つに分ち大学部更に三科に分つ。

- 第一科 化学兼生理科
- 第二科 化学兼物理科
- 第三科 化学兼陶器科

の三科とし化学兼陶器科は三年にして卒業するを得、その主意及び課目は左の如し。

理科大学部化学兼陶器科は化学に基き、陶磁器科の学者を養成せんがために設立せしものにして陶磁器職工長若しくは陶器術の教員たらんと欲するものために適せり。

其の科程は

第一年	有機化学	一週	二時間
	高等無機化学	同	一時間
	独 乙 語	同	四時間
	地 質 学 (第二期第三期)	同	二時間
	陶磁器術講義	同	三時間
	用 器 画	同	二時間
化学実修 (定性分析及化合物応用の研究)	同	同	十時間
第二年			
金 石 学	一週	二時間	

冶 金 学	同	四時間
独 乙 語	同	四時間
高等無機化学	同	一時間
陶磁器術講義	同	三時間
化学実修 (化合物の反応の研究及び定量分析)	同	十時間
第三年		
工業化学	一週	三時間
独 乙 語	同	二時間
化学定説	同	二時間
諸雑誌閲読	同	二時間
実 修 (粘土分析)	一週	十五時間

応用専門部は薬学科と陶器科の二つに分ち、陶器科は三年にして卒業するを得せしめ、又普通学を学習せしものは外国語を知らざるも入学を得せしむ、而してその教授の主意及び課目は左の如し。

応用専門部陶器科は学理と實際に通ずる陶業家を養成するの目的にして、現時日本陶業家の技芸上における長所を学ばしむると共に、進んで、欧州今日の工業上における、最新の学説と其製法を教授し、殊に有色釉薬、絵具等の如き化学上の作用に關係するものに至りては充分に通曉するを得べし。

第一年		
物理学	一週	二時間
化学	同	五時間
工業化学	同	三時間

金石学	同	二時間
用器画	同	二時間
日本画	同	六時間
陶車実修	同	十六時間
独乙語	同	四時間
第二年		
定性分析	一週	八時間
定量分析	同	八時間
工業化学及陶業講義	同	三時間
日本画	同	八時間
陶車及実験	同	十時間
独乙語	同	三時間
第三年		
簿記	一週	三時間
陶業講義	同	三時間
実験	同	三十一時間
独乙語	同	三時間

始め陶器科の開設せらるるや、工学士、山寺容磨氏を聘して教授となせしが、その後、山寺氏去り、明治廿四年夏、東京工業学校卒業生飛鳥井孝太郎氏その後を襲き、爾来なおその椅子により。始め陶器科の設立せられしや全く模範を工業学校に取りしが、日本現時の陶業に比して、その程度の高きを愁い、今年新に応用専門部を置きて、その科程を平易にし、卒業後、直に営業に従事するに適せしむるを以て目的とせり。然れども、該科の設立以来或は教授の転換と設立の日尚お浅きを以て、又器械全く具備せざりし等の憾ありしが、今般小陶窯の外に、日本風の石焼窯を新設し、水煎場、画工場等を整頓し入学生をして陶業を学ぶに於て差し支へなからしめんとせりという。

【尚、昭和三十六年夏、藤岡が軽井沢に加藤與五郎博士を訪問し同志社ハリス理化学校につき会談したがその概要を記載する。

明治廿四年頃京都同志社にはハリス理化学校に陶器科があつた。このハリス理化学校は米人ハリスの出資によるもので下村孝太郎という人が校長格で化学を教えておつた。下村氏は米国で教育を受けた人であつた。そして同志社全体としては米人デビス教師が総長であつた。

処で陶器科には生徒として当時船田某が一人在席だつたと思う。教師として飛鳥井孝太郎があつたが、東京職工学校（後の東京高等工業学校、現東京工業大学）の卒業生でワグネル博士の高弟であつた。同志社ハリス理化学校生徒としては大学を自認している関係上飛鳥井教師を排斥してポイコットをやつたという。陶器科卒業の船田氏は東京に出ていつたが不遇に終つたということだ。

以上は当時ハリス理化学校の生徒であつた加藤與五郎先生（理学博士で、九十才、尚元気で加藤研究所を主宰、同志社大学の優秀学生を招いて指導し、研究所は軽井沢星野に約一万坪の敷地を擁し独力で経営と研究をつづけていられる。先生は先年東京工業大学へ自然科学研究所を寄附された篤志老学究である）を昭和三十六年七月十五日午後軽井沢星野のお宅へお尋ねして当時の御記憶を聞いた実話である。尚先生は自分の研究態度、日本の教育の欠点等、色々と謹聴に価いするお話があつたがこのハリス理化学校には関係がないので省略する。】

第七節 京都陶器会社

明治二十年設立 資本金二十万円（内払込資本金五万五千五百円） 従業員 一二五人（男九六 女二九）

本社の設立は、京都産業界において、京都織物会社について設立されたもので、京都織物会社の資本金五十万円につぐ大工場として、地元の注視をあつめたのみでなく、日本窯業発展史上においても、忘れることはできない。

明治初年以來、遂次発展の道を歩んできた陶業界は、前述したように、明治十四年頃から十八年にかけて、内外不振が続き、相当な打撃を受け、この間海外の需要も美術品から日用品必需品に転換しつつあつた。

この動きに即応して大量生産体制にきりかえるためには、どうしても家内工業から工場制への体制をととのえる必要があつた。

この機運に乘じ、明治十二年、有田の香蘭社が洋式製陶機械の使用による工業化にのり出したが、失敗に終り、そのつぎに登場したのが、本社と有田の精磁社である。

京都陶器会社はつぎの趣旨書に記すように自信と抱負をもつて設立された。ここに、その設立趣意書を摘録する。

○京都陶器会社設立趣旨書（原文のまゝ）

我国の工芸美術ノ製産ニ富ムヤ蓋シ欧米諸国ニ比スルモ譲ラザル所ナリ而シテ其製産物ノ未ダ盛大ナラズ其販路ノ未ダ拡張セサルモノハ職トシテ其製産物ノ時好ニ投シ精巧ヲ極メサルト其製産家ノ衆力ヲ合セ規模ヲ大ニセザルトニ由ラズンハ非ザルナリ故ニ我国ノ工芸美術品ニシテ能ク此辺ノ改良ヲ施サハ製産ヲ益シ国力ヲ大ニスルヲ得ルヤ必セリ其物品ノ種類ハ少ナカラサルモ就中陶器ノ如キハ我国ノ名産ニシテ更ニ其改良ヲ施コシ以テ輸出ヲ海外に盛ニスルヲ期スヘキナリ夫陶器ノ物タル其原料ハ山野ニ得ル所ノ土石ニシテ敢テ昂貴ノ価ヲ有スル品質ニ非サルモ時ニ非常ノ価値ヲ有シ衆人ノ愛重スル所トナル者アルハ是レ其製作ノ精緻意匠ノ高尚ニシタル陶器ヲ産出シ得テ而カモ其製産ノ規模ヲ大ニシ外国ノ需要ニ応セハ我国ノ富力ヲ増ス一大源トナルニ至ルコト予シメ知ルヘシ況ンヤ其原料ハ山野ニ取テ無尽蔵ナルニヨリ其業ヲ拡張シ易キヲヤ陶器ノ改良ハ実ニ今日ノ急務ト云フヘシ我國ノ陶器製造ハ其由来スルヤ久シ矣

皇祖神武天皇推根津彦命ニ命シ大和国天香山ノ土ヲ以テ五器ヲ造ルヲ始メト為ス云々史書ニ見ユ其後往々其法ヲ国内各地ニ伝ヘ二千有余年間曾テ陶器製造ヲ絶ツルコトナシ殊ニ京都ハ旧シノ帝都ノ在ル所ナレハ自ラ百般ノ工芸美術皆盛ニ此地ニ行ハレ古今相踵テ名工妙手ノ輩出セルアリ近世ノ仁清乾山木米ノ如キハ実ニ我國陶業家ノ巨擘ニシテ其製作ノ改良進歩ニ於テ大ニ力アリ今日我国各地製作ノ陶器ヲ聚集シテ其優劣ヲ比較スルニ其品位ノ高尚ナル風致ノ閑雅ナル又形状図様ノ新奇精巧ナル總テ京都ノ右ニ出ルモノナシ是レ京都陶器ノ我國中ニ称揚セラル、所以ナリ然ラハ則チ今日陶器ヲ改良スルモノ宜シク其最モ優等ナル製作地即チ京都ニ就テ計画スルニ若クハナカルヘシ

更ニ転シテ我國陶器ノ外国ニ輸出スルヲ察スルニ其初メ明治六年澳國維納府大博覧会ニ出品セシニ原シ爾來漸ク欧米諸国ニ輸出スルニ至リ一時名声ヲ海外ニ博シタルモ畢竟彼国人カ日本製作品ヲ珍異新奇ナリトシテ玩弄スルタメニ購求スルニ止マリテ未タ日用必須ノ器物トナラサルニヨリ其販路モ遂ニ拡張スル能ハサルノミナラス反テ漸次狭小ナルニ至レリ試ミニ米國ヘ輸出セシ陶器ノ価格ヲ調査スルニ十年前以前ニ在テハ八十万円以上ニ昇リシモ近時ニ至リテ既ニ貳拾万円ニ減縮スルヲ見テ知ルベシ輸出ノ景況如此キ勢ヒナルヨリ我国各地ノ製造家ハ互ニ競争シテ製品ノ改良ヲ務ムルモ徒ニ井蛙ノ偏見ヲ用ヒ外国需用ノ実況ヲ知ラス是ヲ以テ其計画姑息ニ流レ方法宜シヲ得スシテ日に外人ノ信用ヲ失ヒ曾テ輸出ヲ増スノ功ヲ見ル能ハサルハ亦是非モナキ次第ナリ今若シ陶器ノ改良ヲ実行セハ海外ノ需要ハ其増加スヘキコト予メ知ルヘキ所ニシテ其例ヲ挙レ

ハ彼仏國カ陶器日用品ヲ米國ニ輸出スル近年日に増加シテ晚近一ケ年ノ輸出價格殆ント壹千貳百万円ノ多キニ上レルアリ販路ノ拡張ハ豈ニ望ナシトセンヤ況ンヤ外人モ又我國ノ陶器ヲ改良シ博ク欧米諸国ニ輸出スルノ望ヲ抱クアルオヤ

夫レ我國ノ陶器ハ己ニ外人ニ属望セラレ京都ノ陶器ハ又我国内ニ冠タレハ京都ニ於テ一ノ陶器会社ヲ起シ以テ其改良ヲ謀リ其販路ヲ拡張スルハ実ニ適當ノ方案ナルヘシ且京都ニハ多年欧米又ハ清國ニ在リテ陶器ノ実業ヲ研究シタル者数名アリテ改良ノ為メニハ尤モ好機関アリ故ニ此ニ相当ノ資本ヲ集メテ右ノ技術師ヲ用ヒ又外人ト力ヲ合セテ製品ノ品位風致及ヒ形状図様等ヲ考察改良シ海外諸国日常必須品ノ需要ニ應スルノ計画ヲナサハ今日輸出衰退ノ運ヲ一転シテ之ヲ増進セシムルコト敢テ疑フヘキニアサルナリ

尚且我國陶器ノ海外ニ輸出シ得ル所以ヲ述レハ欧米諸国ノ職工賃ハ我國職工賃ニ比シ平均四倍以上ニ当レリ而シテ我國ノ職工ハ能ク之ヲ用フルモノアレハ手芸ノ巧ナル敢テ欧米ノ職工ニ譲ラサルアリ此ノ如キ低廉ノ職工賃ヲ以テ製作シタル物品ハ之ヲ海外ニ輸出スルニ当リ決シテ価値ノ高貴ナル為ニ販路ヲ妨ケラル、患アルコトナシ殊ニ仏國ノ如キ其有名ナル陶器製作地里毛樹ノ製品十分ノ九ハ米國ニ輸出スルヲ目的トシ就中アビラン製造場ノ如キ職工千余人ヲ使役スル一大製造場ナレ其製品ハ總テ本國ニ販売セスニ米國ニ輸出スルヲ目的トセリ此ノ如ク職工ノ賃銀我國ニ四倍スル仏國ノ製造品ニシテ尚米國ニ輸出スルヲ得ルトセハ我國ノ如キ低廉ナル職工ヲ用ヒテ製作シタル陶器ハ之ヲ外国ニ輸出シ仏國ノ製品ト競争スルモ又為シ難キニアラズ即チ我國陶器の輸出目的タル昭々乎トシテ明カナリ

前陳ノ理由アルニヨリ我輩茲ニ発企人トナリ京都ニ一大陶器会社ヲ組織シ外国ノ製式ニ倣ヒ内地ノ製作法ヲ交ヘ洋和ノ教養ヲ建築シテ陶器改良ノ製造場ヲ設置セントス其製品ノ如キハ外国須要ノ地ニ外人ト代理店ヲ約シ以テ之ヲ販売セシメントス

明治廿年 月 日

京都陶器会社発起人

とあり。京都で資本と技術を投入し、輸出向日用品必需品の生産にのり出し、これまでの輸出衰退のきざしを一転して増進させることができるとの自信と期待がうかがわれる。浜岡光哲が、舍密局伝習生、佐藤友太郎、近藤徳太郎等をつれて、京都府から派遣され、仏國に於て、陶磁器専門設備、機械類を見学、一部の機械を購入して帰朝したのを機として発足されたものであった。

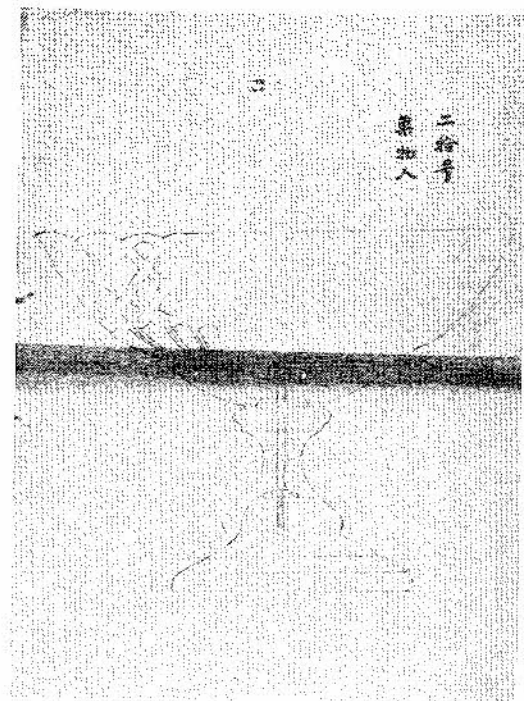
当時米國では、陶磁器の殆んど全部を、仏國リモージュから輸入していたので、低賃金で手先の優れた日本で製造し、米國へ輸出すれば、仏國

明治廿二年三月

必用控圖

京都陶器會社

考案部用

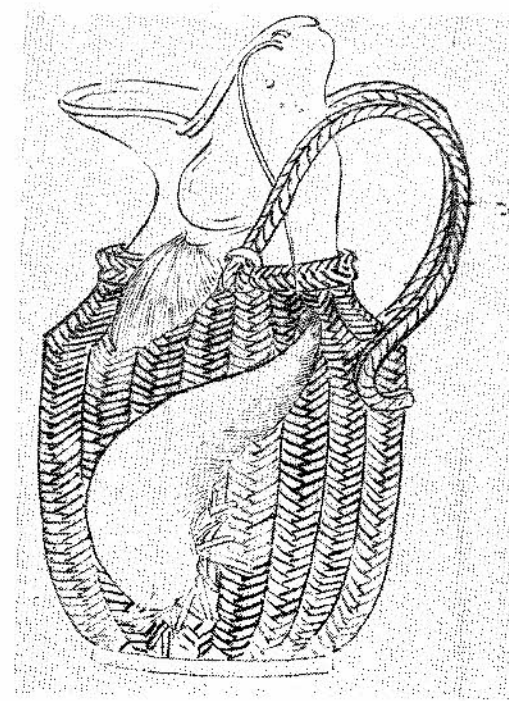


明治22年 京都陶器會社図録 フルーツコンポート

明治22年 京都陶器會社考案部の図録
(宮永東山氏 所藏)

品を凌駕することが可能であるとの見込から、その販路を専ら米国市場に指向していた。

明治二十二年考案された本社見本図柄の一部をここに掲載する。この図柄を見ると、現在でも米国に大量に輸出されている製品と変らない、むしろ斬新なデザインであることを思うと、京都の我々は感慨にたえない。なお、当時重役筆頭であつた田中源太郎の令息の元に保存されていた同社の株金分担見込書や職員名簿及考案課長内海吉堂（日本画家）の意見書、前記設立趣旨書もあるので許しを得て此処に記録することとした。当時の状況を推測することが出来て貴重なものである。尚内海吉堂は竹内栖鳳等と同門であつたようである。



明治22年 京都陶器會社図録 水差シ

○京都陶器會社株金分担見込書

一金貳拾萬円

株金総額

内

金三萬円

粟田清水組合負担

金五萬円

別途置株

金貳萬五千元

右ハ本業熱心者ノ申込ヲ待ツ

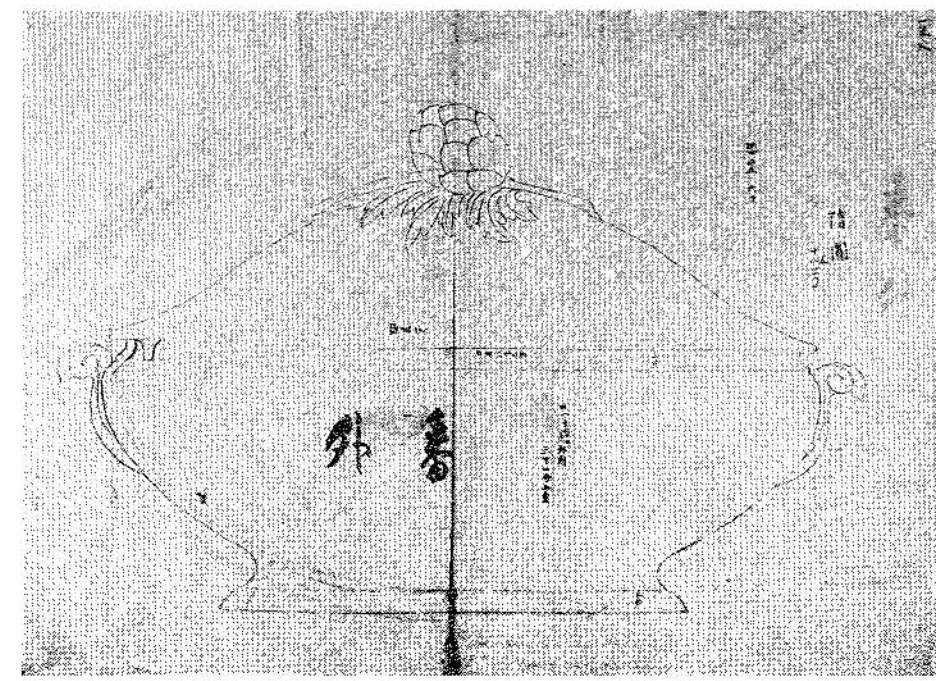
但シ希望者無之トキハ左ノ發起人ニ於テ之ヲ追担スルノ見込

金拾萬五千元

右ハ發起人廿名之ヲ分担ス

發起人々名

田中源太郎	濱岡光哲	内貴甚三郎
市田理八	竹村弥兵衛	山添直次郎
山中利右衛門	高田義助	中村庸次郎
岡本治助	西田清左衛門	芝廣吉
藤井孫兵衛	小泉新兵衛	西村治兵衛
藤原忠兵衛	井上利助	高木齊造
中井三郎兵衛	下村忠兵衛	嶋田種次郎



明治22年 京都陶器會社図録 キヤセロール

五六

係名	担当事務	姓名	職工
支配人		丹羽圭介	"
工業部長		佐藤友太郎	"
事務課長	庶務、出納	伏原有文	"
事務員	手代、売捌方	松風嘉定	"
"	簿記、原料取締	辻子亀之助	"
"	用度	荒木田豊彦	"
工業部課長	考案係	内海吉堂	"
"	"	安達真早	"
"	"	中村潤次郎	"
"	"	林久信	工場部課長、 素焼、呉洲画、本窯
事務員	建築目付	富樫壘平	職工 窯方
"	子兒	畑野清太郎	"
"	"	塩田直三	"
工場部課長	製土、釉藥	井上松兵衛	"
職工	"	波多野定七	"
"	"	森音吉	"
"	"	木村與兵衛	"
"	"	山本源助	呉洲画
			加藤友七
			尾寄潔豊
			松下寅吉
			大藪平三郎
			加藤清十郎
			福田仁三郎
			上田道太郎
			加藤金次郎
			加藤重吉
			吉田次郎吉
			徳田留吉
			波多野兼七
			加藤助三郎
			加藤磯右衛門
			加藤梅三郎
			加藤和助
			水野栄之丞
			加藤銀之丞
			西村富三郎

僻說

職	工	吳洲画	職	工	福田問右衛門
〃	〃	〃	見習職工	錦画	初田嘉市
技	手	錦画	〃	〃	柳橋忠三郎
〃	〃	〃	〃	〃	船木民藏
〃	〃	〃	〃	〃	青木キク
職	工	〃	〃	〃	松下ベス
〃	〃	〃	〃	〃	松
〃	〃	〃	〃	〃	以上
〃	〃	〃	〃	〃	〃

明治廿一年五月十八日

明治廿一年五月十八日

内海吉堂述

蓋シ貿易ノ性質ハ足ラザルヲ足スト需用ニ適合ナルト嗜好ニ投スルトヲ要領トス米國ハ巨大ノ版図ニシテ自國ノ磁器人員ニ給セス故ニ仏独英ノ輸入ヲ仰クコト多數ナリ然ルニ日本磁器ハ從來ノ實用ニハ不適合ナレトモ米國人ノ嗜好ニ適セリ又清國モ巨大ノ版図ナレトモ原ヨリ自國ノ磁器人員

ニ給スルニ足ラズ加之三十年前長毛賊ノ乱ニ全国ノ七分ヲ灰燼トナシ古來精工ノ磁器ハ僅カニ王公貴人の中ニ一三ヲ存セリ現今新製ノ磁器ハ日本ノ精工品ニ不及一遠ク且各処ニ於テ土器ヲ製シテ以テ磁器ノ不足ヲ補ヘリ我日本ハ磁器ノ製造人員ニ超過セリト云可シ故ニ此会社製造品ハ米國ト清國トニ輸出スルヲ以テ方針トス且夫清國ハ最近國ニシテ旅行運輸一切ノ費用ハ欧米ニ比スレハ四分ノ一ニシテ足ル可シ是レ余カ専ラ清國貿易ヲ主張スル所以ニシテ輿論ノ益ス清國ニ傾向スル蓋シ此理アルニ因ル者ナリ但シ機械ノ便利ハ公衆ノ知ル所ナレモ物品ノ形容ト模様トハ其土其國ノ風尚嗜好ニ適セサレハ価格ノ伸縮ニ於テ大關係アリ是レ余カ看本ヲ購入シテ先ツ試ニ数千種ヲ製シ試売ヲ徑テ後チ正ニ大製造ニ着手センヲ希望スル所以ナリ敢テ私説ヲ陳シテ以テ大方君子ノ參考ヲ希モノ爾リ

二十年三月十一日

内海吉堂 印

田中源太郎殿

補言、欧米ハ機械國ナリ清國ハ無機械國ナリ機械ヲ以テ機械國ニ向フハ機械ヲ以テ無機械國ニ向フニハ及ハサル可シ

又、「浜岡光哲二十年史」によれば会社設立に当り、最初は北垣知事のあつせんにより、ドイツ人を發起人に加え、日独合弁事業として経営すべしとの論もあつたようであるが、結局、日本人のみの株式組織で設立された。

註、北垣知事—明治十四年一月—二十五年七月

本社設立については、浜岡光哲、稲畑勝太郎、田中源太郎、山添直次郎等の努力を忘れてはならない。

又、本社の経営陣は、江州出身で、理財の才に富む、山添直次郎を社長に、重役には、田中源太郎、内貴湛三郎、浜岡光哲、中井三郎兵衛、澁沢栄一等、京都及び東京の先覚者、有力者の顔を揃え、丹羽圭介が支配人に任せられ、技師長には、舎密局で、独人、ワグネルの指導を受けフランスに留学して帰朝した佐藤友太郎がなっている。

工場は紀伊郡（現伏見区）深草村福稲（東福寺前）にあり。機械は、有田の精磁社と同じく仏国リモージュのフォール会社製が輸入された。

本場で設備した洋式円窯は、我国における最初のものである。

本工場の操業にあつては、組織的大量生産に経験のある職工を必要としたので、京都のみでなく、瀬戸方面よりも多くの職工を集めている。

こうして明治二十二年稼動し始めたが、僅か二年後の二十四年には、早くもその機能を停止して、先に挫折した有田の精磁社と同じ経過を辿つ

てしまった。

この間の経過を少し探求することとする。

「近代陶磁器業の成立—奈良本」によると、明治二十四年七月、株主総会において、山添社長は二十三年六月から一年間に、四千九百余円の純損金を報告し、その理由には次の諸項をあげている。

- 1 陶器原料購入の失敗
 - 2 製品売りさばきのための値下
 - 3 販路の不充分
 - 4 職場の収縮による機械力との不均合、
- 又、二十八年の本社の事業報告による損失の原因として、二十七、八年日清戦役による、清國向美濃磁器の国内氾濫と市場攪乱があげられている。

又、同社支配人、丹羽圭介談（田中源太郎翁伝による）によれば、人材には事欠かなかったが、

- 1 当初から機械類に二〇万円、建物その他の設備に五〇万円等、固定資産に資金を導入した事に比較して、利純があがらなかった。
 - 2 京都の熟練職工を使用したので、輸向食器の製作も思つたよりコスト高となつた。
 - 3 原料土は、はじめ、肥前より取り寄せたが運賃が高く、森村市左衛門に依頼して、美濃、尾張から購入したが、予期した効果がなかった。
 - 4 新式機械の操業運転には、職人の基本指導よりとりかからねばならなかった。
- 等の事情をあげている。

又同二十五年、米國シカゴ、万国博覧会を機に陶磁器調査に赴いた田中源太郎、西村総左衛門の報告に、それまで陶磁器生産が殆んどなかった米國に、ニュージャシー等に磁器の製造場が設けられ、仏國から熟練工をまねいて既に低廉な製品が現出しているので、会社継続の見込なしとの意見を述べたので、これらの意見、報告等を勘案して、遂に経営を断念し、三十二年に至つて解散の余儀なきに至つた。

この間二十四年七月株主総会では機械の運転を停止すること、職工を四分の一に減らすこととし、二十五年十二月になると職工数は、画工三〇

名、職工三〇名計六〇名となり、二十六年七月商法実施に際しては、新たに登記され、内地向生産に転換をはかる等して、社運挽回につとめたが奏効せず、遂に三十二年解散に至つたことは、京都の業界としては、痛恨事であるが、本社の設立は、ただに京都のみならず、日本陶業史上よりみても、一大試みであつたことを心にとめるべきである。

- 註、1 解散時まで本社の職工頭であつた井上延年は後に独立して五条坂で陶磁器業を営み共に工員としてつとめたその息松風嘉定（三代）は松風工業会社を創立して我国業界に貢献した。
- 2 本社解散直前に五車楼書店主の藤井孫六が社長となり経営したが再建はできなかった。
- 3 解散後本社の建物は村井が買取り印刷業を開き、後煙草製造工場となり、次に煙草専売局の印刷工場や倉庫になった。現在カルタ工場や住宅のある処である。
- 4 本社は輸出向磁器製造を目的として始められたものだが、経営不振の結果、窮余の策として電気用磚子の製造より耐火煉瓦の製造をも企てたが、皆失敗に終っている。

〔余 録 11〕

京都陶器会社の営業状況

同社の経過に関しては、大日本窯業協会誌、明治二十六年八月、第十二号以降に、二、三記載されているのでこれを抜萃する。

- ① 京都陶器会社の外国向皿、（明二六、八、第十二号）
六寸廻りの外国向皿一枚の同社製品は、名古屋より高きこと僅かに六厘、これがため、外国向となる能はず。
（窯業協会雑誌第二十六号（明二七、十））
- ② 京都陶器会社の磚電器
当今益々内外の好評を得て、京都電燈、電気鉄道両会社を始め、大阪、名古屋等よりも続々注文ある由。
（窯業協会雑誌第三十一号（明二八、三））
- ③ 京都陶器会社明治廿七年中の営業報告

日本の陶業は概括的より分業的に進歩し、益々其精微に入るに従い益々利益を増加するものに非ずして分業的の事業は一変して概括的の事業となり業務の多端なるに従い、益々利益減少し其極一敗起つ能はざるに至らんとす。

回顧すれば今より十四、五年の前尾州に於て始めて普通の珈琲碗を製出せし当時は一組、三十銭の高価なりしも、漸時製造の熟練と競争者の輩出に依り、其価下落に趣きしも、七・八年前即ち当社創立の時分迄は一組十五、六銭の価格を保ちたるも、日本貿易商人の拙劣たると陶業者資本の薄弱なるとは其価格を保持し得ず、貿易商人は唯価格の点に於て競争し、其幣の波及する所、内地製造家の投売となり品物は日に粗製に流れ、価格の下落は際限なく両三年前に至ては終にコーヒ碗一組の価、五銭とはなれり、コーヒ碗一組の価五銭と云うに至ては製造家は如何に原料を粗悪になし如何に工銀を減少するも最早一厘一毛の利潤なく、唯遊んで貴重なる日月を消費するよりは寧ろ損亡とならざるかぎり之をなすに如かずと云うに止まれり、当会社も此際、昨廿六年関西貿易会社と特約を結び、職工を増員し経費を増加し大に海外輸出品の製造を拡張し以て其収益を増加せんとはかりしに、貿易上の機勢は此計画に反対の波動を起し来り、前の予想は今悉く其空想なりしを嘆ずるの有様となれり、嗚呼憐れなる状態よ、嗚呼不幸なる珈琲碗よ……

昨年来米国貿易の不振は、五銭の珈琲碗は忽然下落して二銭二厘とはなれり。

- ④ 京都陶器会社の耐火煉瓦（窯業協会雑誌、明治二十九年八月号）

明治廿八年より製造している耐火煉瓦は、非常に好況にて大阪及名古屋地方より続々注文あり。

〔余 録 12〕

松風嘉定とフォール会社技師・ドラブルとの会談

松風工業初代社長松風嘉定が大正十四年五月ジュネーブにて第七回国際労働會議の開催に我国資本家代表として選任派遣された際、フランス、セーブルの製陶所を見学し、序に同地のフォール製陶機械工場を訪問した七月六日の日記を抜萃する。（このフォール会社は古く京都陶器会社に機械を入れた処）

当時ドラブルなる技師来朝機械据付に従事せし事あるを話せば其ドラブル氏は独立して今尚健在なりと聞き、（中略）早速電話を通ぜらる。ドラブル氏も意外の事に大に喜び早速来らんことを勧めらる。直ちに訪問彼も我も年老いたる事は同様なりなど語り合ひ互に無事を悦び

且久潤を述す、ドラブル氏懷中より紙に包める二葉の小形写真を取り出して予に示す、雨傘をかざせる日本服のドラブル氏裏面に京極小谷写真館とあり、今一葉は若き日本婦人の写真（一見宮川町の女と見らる）なり、かゝるものを懷中しては夫人に咎められずと反問せしに、こは日本滞在中食事の世話になりし婦人なりと説明し居れりと互に呵々大笑す（中略）、夕七時ドラブル氏夫妻來訪會食す（下略）七月七日、朝ドラブル氏を訪ひ窯設計家の紹介を依頼す、氏また大切に所有せる紙包をポケットより取出して示す、見れば京都陶器会社機械据付後の謝状なり、無事に据付を了し茲に三千法を増呈す社長山添直次郎とあり、今一通巻紙に認めし長き書出しあり

明治二十一年七月三十日

林きく

七月一日

八十四錢

小さん十四

壹円

しらきく

拾錢

くるま

七月十四日

八十四錢

はつ十四

壹円

しらきく

七錢

くるま

拾錢

御入用御酒いろ／＼、ろうそく

五十錢

其他

ノ式円五十一錢

外一通の書出しは五回分にて拾円五十八錢とあり、

四十年間色の変つた写真を懷中し、其當時の書出しまで保存するなど仏人氣質の半面を窺うに足る。昔を偲ぶ好個の資料である（下略）

第八節 京都市立陶磁器試験場と藤江永孝

京都では徳川末期仁清、乾山、木米等の名工輩出し、古い伝統と相まつて、これらの名工の遺風をつぎ、その意匠は全国の指導的地位にあつた

が、他面ややもすれば、旧套墨守となり、新しい研究、学理の導入等に欠けていたので新しい生産方法を用いる欧州に比べると、産業的に或は科学的に非常な相違があり、その進歩の足跡も誠に遅々としていた。

明治二十五、六年頃、京焼の声価を担つていた、幹山、丹山、道八相ついで故人となり、帶山も又、隱居し、業界は寂りようの感深く、業界でも将来を考へて、新しい学理を応用し製法等の改善を指導する機関の必要性が痛感されるところであつた。よつて、京都陶磁器商工組合が主となり、窯業界、学界有力者の協力を得、遂に市会の協賛を得て、明治二十九年五月、京都市立陶磁器試験場の設立を見るに至た。

陶磁器試験場の設立及びその後の経過に関しては、大正五年四月、京都陶磁器試験場創立二十周年記念式において述べられた工学博士、中沢岩太の式辞を記述するのが最も正確な記録であると信じ此處に掲載する。

○京都陶磁器試験場創立二十周年記念式ニ於テ所感ヲ述ブ

京都ニ於テ陶磁器試験場ヲ設立セントスル動機ハ明治二十七年ノ頃創メテ起リ翌二十八年、第四回内国勸業博覽会ヲ洛東岡崎ノ地ニ開催セラ
ル、ヤ各地ノ出品多ク聚集シ其中ニ在テ京都ノ製作品ハ実ニ振ハサルノ憾アルヲ觀テ更ニ希望ヲ強フシ明治二十九年ノ九月ニハ弥々実行スルコ
ト、ナレルモノナリ

按スルニ維新以來世ノ騷然タルトキニアリテモ尚ホ京焼ノ名声ハ衰ヘズ時ニハ海外輸出ヲ企画シ斯業ノ維持ヲ図リタルモノ當時稀世ノ名人出デ
、之カ事業ヲ經營セル効果ト隆盛タリシ往時ノ隋力ニ由ルナラン然ルニ明治二十四五年ノ頃ハ名声赫々タリシ幹山、丹山、錦光山、道八ノ諸老
ハ逝キ帶山ハ業ヲ廢シテ斯界ハ稍々寂寞タリ独リ清風与平其ノ特種ナル製作品ヲ以テ第四回ノ博覽会ニ京焼ノ名ヲ保チ得タルニ過キサリキ若カ
モ与平ノ長所ハ技工精緻ニシテ六兵衛、道八ノ如キ雅味ヲ帶ヒ古風ノ趣アルモノニアラサレハ其技芸ハ其人ニ限ルモノニテ之ヲ模シ之ヲ学フト
テ土地ノ物産ヲ増加スルニ適セス又与平ハ正シク稀世ノ名工ナリシト雖モ同業者ヲ奨メテ事業全般ノ發展ヲ図ルヘキ器ニハアサリシナリ時恰
カモ世間ハ殖産興業ヲ唱論シ海外輸出ヲ奨励スルノ急ナルニ由リ此ノ地ニ於テ製造ヲ專ラトスル者商業ヲ営ム者競フテ之ニ応シ利益ヲ旨トセル
為メ京焼ノ製造家ハ概ネ外人ノ希望ニ副フモノヲ選製スルコト、ナリ適々旧來ノ需用ニ応スル物品ヲ製造スル者アリテモ品位ノ高上ニハ意ヲ
注カス反テ実費ノ少ナキヲ求ムルニ汲々トシテ勉メタリ斯ル趨勢ヲ持續シテ漸次技芸ハ衰頹ニ傾キ時ノ博覽会展覽会ニ於テ振ハサルハ偶然ニア
ラサルナリ若シ横浜ノ宮川香山氏カ奮テ出品シ之ヲ併列シタラハ京都ノ出品ハ実ニ顔色ナシト評セラレン京焼ノ衰頹ハ此時ヨリ甚タシキハアラ

世ノ鑑賞家ハ斯克モ京焼ノ衰ヘタルヲ憂ヘ京都在住ノ有力者ニ於テモ自然之ヲ諒知セラレ加之當時海外ヨリ輸入セル物品ト同一物ヲ造ラシメント欲スル者アリテモ之ニ応スヘキ技術ハ欠乏シテ能ハサルコト往々アリ京都人士トシテハ將ニ放任スル能ハサルモノト認メラレタリ此時当業者ニアリテハ錦光山宗兵衛、丹山陸郎、西田伊助、安田源七、伊東陶山、高橋道八、清水六兵衛、清風与平、吉岡吉兵衛ノ諸子其以外ニ在テハ石田喜兵衛、石田音吉、林長次郎、西村治兵衛、堀田康人、富田半兵衛、渡辺伊之助、河村清七、玉水新太郎、堤弥兵衛、内貴甚三郎、中村栄助、中孫三郎、中安信三郎、中野忠八、上野宇八、碓井小三郎、能勢儀兵衛、山中小兵衛、山本清助、古川吉兵衛、雨森菊太郎、朝尾春直、東枝吉兵衛、木村勝次郎、穴戸亀三郎、下間庄右エ門、鈴鹿辨三郎、宮崎豊次

其他有力ナル諸氏力大ニ尽瘁セラレ遂ニ陶磁器組合ヲシテ京都市ノ保護ヲ受ケ試験場ヲ設立セシムルコト、ナレリ之レ明治二十九年九月ナリキ當時其ノ經費ハ僅カニ二千余円ニシテ若カモ之ニ充ツヘキ家屋ノ類ハ組合ニ於テ負担セルモノナリシト聞ク偕テ明治二十九年弥々陶磁器試験場ヲ設立スヘシト決セラル、ヤ之カ局ニ当ル者ヲ選抜シタルニ大方ノ識者ハ挙テ理学士植田豊橘（現今ノ場長）ヲ推シタレトモ同氏ハ他ノ事情アリテ之ニ応スルコト能ハス依テ止ムナク藤江永孝氏ヲ強テ其任ニ就カシメタルモノナリキ

藤江氏ハ久シキ以前ヨリ独人ワグネル氏ニ就テ修学セラレ當時本邦ニ於ケル斯途専門家中屈指ノ一人タリ拡ク各地ヲ巡見シテ斯業ヲ営ム所ニハ到ラサルナク夫ノ実力ニハ乏シカラサリシモ如何セン見聞ハ海内ノ外ニ出デズ若カモ京都ノ窯業ハ一時衰ヘタリトハ云ヘ往時ハ仁清、乾山等非凡ノ名家ヲ出セル所タレハ其遺業ハ悉ク亡失セルニアラス旧家カ夫ノ秘作ヲ施スノ術技ハ尚ホ海内ニ覇タルヘキモノナシトセサリシ此地ニ於テ更ニ進歩改良ノ途ヲ講センコトハ容易ナラサル業ナリ同氏ノ実力モ尚ホ足ラサルモノアランカト疑ハル加之同氏ノ長技ハ學理應用ノ材料選択ニアリテ就任以來頻リニ其方面ノ研究ヲ尽シ奏効唯ナラサルモノアリタレトモ如何セン當時ノ実地家ハ學理應用ノ実益アルコトヲ覺ラス之レト同時ニ藤江氏ニ於テモ青年ノ例トシテ應用ノ方法ヲ説明スルニ勉メタリト雖モ未タ巧妙ノ域ニ達セサレハ斯途ノ尽力者ニ在テハ不満ヲ懷ケルコトモアリタルナリ

此ニ至リテ藤江氏ヲ海外ニ送り更ニ同氏ノ鑑識ヲシテ拡ク且高尚ニ亘ラシメ遠大ノ目的ヲ樹テシムルノ必要ヲ認メ氏ニ於テモ亦自カラ安ンセサル所アリテ海外ノ視察ヲ切望スルコト急ナリ明治三十一年ニハ南清ノ地方ニ巡回シ長江沿岸ニ於テハ常州府ノ朱泥、白泥、幡龍湖沿岸ニ於テハ

景德鎮ニ於ケル磁器ノ製造ヲ視察研究シ該地産ノ製品ヲ多ク購入シテ帰朝セリ現今参考館ニ陳列シアルモノハ此時ニ蒐集セルモノトス支那地方ノ視察ニ由リテ支那風ノ物品ヲ製造スルコトニハ大ニ会得セラレ因テ支那異須ヲ研究シテ自由ニ之ヲ製造シ実業ノ便益ヲ図リ或ハ辰砂ノ釉藥ヲ調合シテ試ムル等漸ク当業者ノ一部ハ其実果ヲ認ムルニ至レリ此ニ於テカ更ニ進ンテ欧米ノ製造ヲ巡視スル希望ハ益々旺盛トナリ遂ニ意ヲ決シテ農商務省実業練習生タルコトヲ出願シ京都市モ亦之ヲ補助スルノ厚意ヲ尽シ因テ明治三十二年ヨリ三十四年ニ亘ル二ケ年ノ間主トシテ独逸ノ二箇國ニ留マリ大ニ斯途ノ研究に勉メ且斬新ナル仕法ヲ學ヒテ鑑識上ノ範圍ヲ拡メラレタリ

是ヨリ前試験場ニ於テ日々研究ヲ尽シ実業上有益トナル結果ヲ致スコトアルモ如何セン実地家ハ其ノ真情ヲ了解シ且之ヲ信用セサレハ採テ以テ日々ノ業務ニ応用スルコトモ稀ナリ為ニ効果アル研究苦心モ漸ク水泡ニ帰シ反テ他地方ノ人其有利ナルヲ覺リテ實地ニ行フノ速カナルコトモアラントセリ之レ試験場ト実地家トノ間ニ介スル階梯タルモノ、存在セサルニ基因スルヤ明カナリ之カ階梯ヲ造ルハ実業家ノ子弟ヲ教養スルヲ以テ最モ適當トシ明治三十二年ヨリ伝習生ヲ置キ學理ニ基ク新規ノ事業ヲ伝授スルコト、セリ此ノ事業ハ予想以上ノ効果ヲ實顕シ彼ノ高橋道八、新開六郎、清水梓次、河村蟠山、宇野宗太郎、松林儀一、木村弥一郎、入江道之諸氏ノ如キハ伝習所ノ成業者ニシテ父兄ト共ニ新規ノ物品ヲ製作シ京焼ニ新趣味ヲ増加セルノミナラス是等ノ青年力実施スル有様ヲ見テ他ノ營業家モ亦試験場ノ事業ハ實地ニ有効ナルコトヲ知覺スルニ至リ頭初ノ目的ヲ克ク貫徹セリト云フヘシ

藤江氏ノ帰朝セルヤ茲ニ試験場ノ事業ハ大ニ其趣ヲ一変セルモノアリタリ蓋シ從來ハ製造ニ関スル方法ヲ立案シ実地家ヲシテ之ヲ行ハシムルニ勉メタレトモ此ノ方法ハ効果の揚カルコト速カナラサルヲ察シテ親カラ優秀ナル物品ヲ製作シ実地家ニハ素ヨリ世間一般ノ人士ニモ之ヲ示シ夫ノ世評ノ揚レルモノ、製造法ハ当業者ヨリ望ミ出ツルヲ俟テ教示スルコトニ改メタルナリ且ツ恰モ此ノ時ハ前ノ伝習生モ略ホ成業ノ時ナルヲ以テ一層実業界ニ効果ヲ奏セシムルノ便宜ヲ得タリ加之藤江氏ハ帰朝以來或ハ彼地ノ製品ヲ示シテ講演ヲ行ヒ或ハ器械等ヲ使用シテ實地ノ利便ヲ解キ実業家ノ旧守思想ヲ動カスニ勉メ其効果ノ揚ルニ從テ試験事業モ亦増加シタレハ茲ニ試験場ノ擴張ヲ必要トスルニ至レリ殊ニ從來ヨリ蒐集セル参考品ヲ木造家屋ニ配列スルノ危険ナルヲ憂ヒ急ニ煉瓦造ノ参考館ヲ設立スルコト、ナリ明治三十五年ニハ成就シ続テ其他ノ建造物ヲ計劃シテ三十六年ニハ出来シ土地モ必要ニ応シテ拡張スルコト、ナリタリ而シテ明治三十五年ヨリ毎年一回試験場ノ製作物品ヲ娛情庵ニ陳列シ当路者及実業家ニ觀覽セシムルコトトシ夫ノ三十六年ニハ恰カモ第五回内國勸業博覽會ヲ大阪ニ開催セラレタレハ審査官諸氏ヲ招キテ本場製品ト外

國製品トノ比較審査ヲ請ヒタルコトモアリタリ此時ヨリ京都陶磁器試験場ノ名声ハ漸ク他地方ニモ揚カリ殊ニ管轄庁タル農商務省モ当該試験場ノ効果ヲ認メラル、コト、ナリ明治三十九年ヨリ産業試験講習所補助法ニ由リ毎年若干ノ補助ヲ下附セラレタリ斯クテ実業家ハ試験場ノ誘導ニ由リ幾分新規ノ方法ヲ行ハントスルニ当リ旧來ノ職工徒弟ハ斯途ニ適當ナラサルモノアルヲ發見シ新ニ徒弟タルヘキ若年輩ヲ多ク養成スルノ必要ニ迫リ徒弟学校ノ設立ヲ切望シタレトモ京都市ハ之ヲ容レズ遂ニ止ムヲ得ス之レト畧々同一ナル目的ヲ遂行シ得ヘキ附屬伝習所ヲ設立スルコト、ナリ先年廃校トナリタル第三高等小学校ノ建造物ヲ以テ其用ニ供セシメ明治四十四年ヨリ伝習生ヲ募集シ幼年者ヲ教養スルコト、ナレリ蓋シ之カ為メ以前ヨリ教養セル実業家ノ子弟ハ特別伝習生ト称スルニ改メラレタリ其後ハ試験場ト実業者ノ關係益々密接トナリ益々実利ヲ修ムルニ適フコト、ナリタリ

以上ハ試験場員ノ職責ニ就テ実施セラレタル所ヲ縷述セルモノナリ而シテ現ニ実業場裡ニ衣食セル職工徒弟ノ技能ヲ進歩セシムルコトモ亦必要ナレハ明治三十三年以來実業家ノ有志ニ由リテ職工徒弟奨励会ヲ組織シ之レニハ試験場ノ諸員組合ノ諸氏ハ職務以外ニ補佐ノ勞ヲ義捐シ京都商業會議所ハ賞金ヲ与ヘテ奨励シ可及丈世ノ進化ニ連レテ斯業ヲ進化セシメンコトニ勉メタリ又陶業者ニハ平素ノ怠慢ヲ戒ムル為メ奨陶会ヲ組織シ夫會費ヲ以テ選取シタル物品ヲ購入シ之ヲ會員ニ分配シテ批評ヲ乞ヒ當業者ヲシテ寸時モ油断ナカラシメンコトヲ努メラレタリ

以上ノ二事業ハ職トシテ試験場ニ属スルモノニアラサレトモ延ヒテハ試験場ノ事業ヲ有益ニ応用スル途ヲ開クモノトナリ以テ益々事業ニ利便ヲ植ヘ京都焼ノ近時ハ驟々トシテ向上スル結果ヲ致セリ

今ヤ京都ノ陶磁器製造事業ハ著シク進歩シ昨今博覽會共進會ニ京都ノ出品ナクンハ陶磁器ノ部ハ実ニ寥々タルノ觀アリト云フ京焼ノ名声ハ漸ク挽回セラレ再ヒ全国ニ一頭地ヲ拔キ時ニハ同業地ノ指導者トナリ先鞭者タルノ光榮ヲ荷フニ至レリ先年清風与平氏病没シテ京都ハ唯一ノ名家ヲ失ヒタリト云ハレタレ氏之レカ為メニハ京焼ノ盛衰ニ関シ影響セルコト更ニナカリキ斯クモ過クル二十年間ニ実業家諸子ノ技芸ヲ進メ其ノ基礎ヲ固フスルニ至レルハ之レ陰ニ陽ニ試験場ノ効果ナラザルハアラス盛ナリト云フヘシ

京都陶磁器試験場ニ於テ從來実験研究ヲ遂ケタルモノ豈ニ啻ニ海外ノ物品ヲ模作セルノミナラス我邦及支那ニ於ケル古來ノ製作ニ付キテモ殆ト及ハサル所アラス之カ技能ヲ世ニ発表セサルモノハ他ナシ実業者中支那品若クハ古物ノ模造ヲ業トスル者アレハ是等ト競争スルノ必要ナケレハナリ然レトモ一朝斯途ノ製作ヲ必要トスレハ忽チ之ヲ行フニ躊躇セス敢テ其技ノ欠乏スルニアラサルナリ

先般大札ノ際京都市ノ献上物トシテ製作ヲ命セラル、ヤ毘沙門堂ニアル青瓷ノ風ニ倣フテ花瓶ヲ造ルヤサシモ古今人ノ及ハサル妙技ノ域ニ達シタル製作ヲ行ヒ世人ノ好評ヲ博シタルニ鑑ミテモ明カナラン加之近來選用スル模様ノ図案ハ或ハ天平ノ昔ニアルモノヲ選ビ或ハエジプト、ペルシヤノ大古ヲ採リ常ニ実業者ノ先驅ニ之レ勉メ其ノ及ハサル所ヲ行フヲ以テ指導ノ任ヲ完フセントセリ世人カ稍モスレハ之ヲ奇異トスレトモソハ其ノ真意ヲ解セス智能ノ未タ及ハサルモノ、言ト云フヘシ

斯クモ試験場ノ技能ハ全国ヲ挙テ攷メ古今ニ通シテ讓ラサル所アレハ土地ノ実業者ハ之レニ鑑ミテ進歩ノ速カナルモノアルヤ敢テ偶然ニアラサルナリ

然リト雖當試験場ノ光彩ハ遺憾ナカラ東洋ノ一隅ニ止マルモノト云ハサルヲ得ス之ヲ欧米ノ事業ニ比較セハ未タ及ハサルモノ多々アルヲ如何セン見ヨヤ仏國セーブルノ製作ヲ優美精巧ナル我レノ遠ク及ハサル所コッペンハーゲンノ製品ハ佳麗精緻ヲ庄スルノ概アリ独塊ノ製作ニ至リテハ研究ノ効果日一日トシテ新タナリ何レノ日カ之ヲ凌駕スルヲ得ヘケン當試験場ノ成績ヲ窺フニ米國ノ業為ニ比シテ稍々近キニ進ミタル技能アルカ如シ而シテ米國ハ陶磁器ヲ以テ悉ク著名ナリト云フニアラス一度之ヲ凌駕シ一步ヲ躰スルコトアリトテ何ソ誇ルニ足ランヤ我カ製産物ヲ世界各國ニ致シテ益々貿易ノ隆盛ヲ期セントスル試験場トシテハ前途遠達ナリト云フヘキナリ

試験場ノ成績ハ不可ナルニアラス其ノ実業界ニ尽セル所多ト云フヘケレトモ近時歐洲ノ戦亂ニ対シテ我カ工業ノ寸時モ速カニ急進センコトヲ切望スルノ余リ猶未タ遅々タルノ憾ナキ能ハサルナリ若カモ本土及朝鮮ハ斯業材料ノ天産ニ豊カナレハ夫ノ研究ト努力トニ俟タハ世界一等ノ地位ヲ占ムルコト豈ニ得ヘカラサルモノナランヤ希クハ局ニ当ル人ハ素ヨリ之カ援助補佐ノ任ニアル者將來一層協力ヲ強フシ互ニ奮勵シ以テ京焼ノ名声ヲ世界ニ輝カシ一日モ早く京都物産ノ億兆ヲ数フルノ域ニ至ラシメンコトヲ

大正五年四月二十八日

工学博士 中 澤 岩 太

以下京都市陶磁器試験場の経過につき、参考書類及び古老、先輩の口述等よりその主要事項につき記述する。

○京都市陶磁器試験場処務規程

第一条 本所は常に本市陶磁器業の実況に注意し陶磁器の製造及之れに関する一切の改良進歩を図るため試験を施行するものとする

第二条 本所は本市陶磁器業者の依頼に応じ陶磁器に関する質疑に答へ又は試験を依頼するときは経費の許す以内無料にて之を施行す

第三条 本所に於て施行したる試験の結果其成効したるものは可成これを当業者に公示す

第四条 本市陶磁器業に關係を有するものは何時に眼らず本所の執務を參觀するを得

第五条 本所は当業者の依頼により執務に差支へなき限りは相当の修繕料及び経費を徴し器械及び窯の使用を許可することあるべし

但しこれがため毀損せし場合には依頼者より規約を以て弁償せしむべし

第六条 本所に於て必要と認むる時は当業者を招集し講話を開くことを得

第七条 当業者の子弟中本所に入り技術を習得したき志願の者は執務に差支なき限り之を許可することあるべし

但し試験用の材料等は一切之を支給せず

第八条 本所の執務に関し差支なきときは所員をして管内外に出張せしむることあるべし

以上の業務項目を遂行するため、洋風円窯を奨励し、輸出陶器の振興を計るために栗田焼の改良、半磁器の創製、清水焼を更に堅緻、純白とする方法、電気絶縁物、化学用磁器の研究等、種々この方面に於て、改善、發達のために、研究、実験、指導が行われている。今、これらの諸点につき、若干述べてみる。

1 業界では、殆んど登窯を使用し、燃料を松材のみに依頼し、燃料費の高騰、その他種々の問題を含んでいたが、試験場創立と同時に、石炭窯三基を設置し、明治四十年には洋式側焰式円窯一基を加え、一般の試用に供した。

註、松風陶器合資会社は、試験場の設計監督によって円窯及び角窯二基等を設置し、石炭焼成をはじめた。其の他にも登窯の改築、焼窯の改造等を行う者も多く、本試験場の指導による所大であった。

2 ゼーゲル氏三角錐の製作

従來の焼成温度の測定は陶片色見と、肉眼による火色の推定によるほかはなく、しばしば大失敗を招くことがあった。試験場は三十一年末ゼーゲル氏錐（明治十九年独乙ゼーゲル博士の創成になるもの）をつくり、業者に無代にて分与した（同四十一年より実費徴収）

3 京都の陶磁器原料はその大部を、他府県産に依存するが、試験場の試験、指導の結果、新たに次の原料を使用するようになった（日本近世

窯業史参照

A 磁器原料

伊予長石（三雲石代用）

伊予硅石（日の岡石代用）

美濃蛙目（信楽土代用）

B 栗田焼原料

美濃蛙目、瀬戸木節、今山木節、

石打木節（信楽土代用）

蠟石（白絵土代用）

C 耐火材料

蠟石、今山及び石打木節（童仙房土代用）

D 釉薬原料

伊予長石、及び伊予硅石（三雲石代用）

広島産石灰石及び石部産石灰石（柞灰及び土灰代用）

4 試験場の研究成果により、有力商品となつたもの。

無罎栗田生地、半磁器、硬質陶器、硬質磁器、マジヨリカ焼、特別高圧電気用磁器

試験場の試験、研究の結果、着々と成果上り、前記、松風陶器合資会社、錦光山工場、京都陶磁器会社等には洋式設備が採用され、又業界に機械の応用を奨励し、図案、着画法の改良、伝習生の養成等に力をそそぎ、明治三十五年の参考館の完成、公開等京都陶業の発展に資することが大變多かつた。

○京都市立陶磁器試験場創立以来の記録から特筆すべき事項を摘録する。

○明治卅年頃の試験場商議員は

錦光山	宗兵衛	伊東陶山	高橋道八	吉岡吉兵衛	清風与平	小島利兵衛
谷口長次郎	宮川治助	橋本為七	藤井孫六	平木直次郎	岡本寛治	
安田源七						

の十三名であつた

○明治三十一年度の報告中より

○室内の火度を測定するは従来只単に肉眼及び色見に拠るのみなりし為往々過誤あるを免れさりしが本所は独逸国ゼーゲル氏の熱度計に倣い本邦原料をもつて之れを調査製作し当業者をしてこれを試用せしめしに何れも其便利有益なるを認め今や毎焼成之れを応用するの製造家頗る多数なり。

とありこれ本邦陶業界がゼーゲル氏コーンを使用するに至つた嚆矢であらう。

○京都陶磁器の染付及絵付は追年画風漸々拙下の傾向ありとて当業者これを慨し本年二月以後競技会を組織しこれが奨励を謀れり本場はこれに助力し且つ試焼の際同会の製品を焼成し与へたり。（これ京都陶磁器奨励会の始めなり）

○同業者に原料を融通することを目的として精良会なる同業者が組織する団体あり本場は同会の依頼に応じ新原料の品質検定、用途指定等の勞をとれり。

○明治卅二年度の報告中より

商議員囑託満期につき改選あり卅年度の商議員中、高橋道八と平木直次郎の二氏が除かれ新に清水六兵衛が加えられている。

又場長藤江永孝、欧米留学に出かけ工学博士中沢岩太が顧問を囑託されて居る。

○明治卅三年度報告中より

○我国にて古來使用せる染付磁器絵具は悉く固形体なれば之を細磨するに幾多の時日と経費とを要せしのみならず彩色の濃淡宣しきを得る事難く加之焼成火度の具合により顔料の流散及び焦出等の欠点あるを以て本場は之が改良に苦心し種々の液体顔料を発明するに至れり之れ本邦未

曾有の事にして右の欠点を除くの利益あるのみならず描画実是一種の妙味を有せり而して更に研究を積み全く欠点なきに至りたるを以て之れを公告し応用せる業者少なからず。

○磁器染付黒色絵具は日本磁器の焼成法にては発色甚だ困難にして未だ曾て純良なる黒色を見ざりしが本場は一新製法を案出して完全なる染付黒色絵具を発明するに至れり依て評議員会を開き之れを報告し実用に供したり。

○磁器染付黄色絵具は万国未だこれを製する能はず只僅に三四年前美濃の鉾山にて鉾石と共に二三粒を産出する一種の細砂が黄色を出す事を発見せしのみなりしが本場はこれが製法を研究し遂に一新製法により黄色染付絵具を発明したり、其価高からざるを以て之れを利用する人少なからず。

○石膏型を作りて鑄込法に応用し、又製陶機械或は圧作製法の応用を実施伝授するに努めたり。

○明治三十四年度の報告書中より

○染焼釉薬の含鉛量につき内務省令取締規則にふれるものありて問題となりたれば代用釉薬を試験研究して業者に其製法を教授したり。

○十一月廿四日伝習生の第一期卒業す次の如し。

明治卅二年一月入学	卅三年十二月卒業	高橋道八
"	"	小山源治
"	"	岡本寛治
"	"	浅利文治郎
"	"	赤松安太郎
尚第二期生として次の諸氏入学		
明治卅四年一月入学		井上清二
"		新開六郎
"		寺林友造

○明治三十五年度報告中より

○職員に多少の変更あり

依頼退職 技手 森 勇三郎
尚当時の職員、職工名を列記すれば

所長	藤江永孝
顧問	工学博士 中沢岩太
技手	安田乙吉
“	中村昇
“	菊地左馬太郎
助手	高橋道八
書記	寺沢知為
職工	中小路七造
“	松本兵松
“	菊岡瀧之助
“	塩見栄吉
“	松本カツ
“	松本フサ
○商議員名	
下京区祇園南側町	陶磁器製造 伊東陶山
“ 七条通堀川西入	“ 販売 橋本為七

“	白川筋三条下ル	“	画工 岡本寛治
“	馬町通鐘鐺町	“	販売 吉岡吉之助
“	清水坂三丁目	“	販売 谷口長治郎
“	三条通白川橋東入	陶磁器製造	安田源七
“	五条通橋東五丁目	“	製造 清水六兵衛
“	三丁目	“	販売 小島利兵衛
“	五丁目	“	販売 宮川岸之助
“	二丁目	陶器株式会社々々長	藤井孫六
“	五丁目	陶磁器製造	清風與平
“	三条通白川橋東三丁目	“	製造 錦光山 宗兵衛

○当時の職工等に就て

明治廿九年 十月雇入	日給三十五錢	裏仕 松本兵松
“	日給十五錢	手伝 松本カツ
明治廿九年十二月雇入	日給五十錢	細工 長谷川寅助
明治卅一年 四月	日給十五錢	手伝 葛本治兵衛
明治卅二年 五月	日給十五錢	手伝 松本フサ
明治卅三年 十月	日給八十錢	細工 中小路七造
明治卅四年 四月	日給廿錢	手伝 長谷川 四郎藏
明治卅一年 七月	無給	細工 上田政太郎
明治廿九年 八月	一ヶ月六円	使丁 辻野庄右門

明治卅一年九月” 一ヶ月六円 使丁 福島金治郎
 明治卅二年二月” 日給廿錢 ” 松見礒右エ門

○試験場の施行せし事業に就きての記事中

- (1) 案出せし試験の実地試験
 - (2) ” 間接理論上の試験
 - (3) 依頼試験、依頼図案の調製
 - (4) 設計依頼
 - (5) 質疑応答
 - (6) 生徒養成
 - (7) 機械及窯の貸与
 - (8) 産額の増大（京都産陶磁器の）
 - (9) 新規製品の創始
 - (a) 半磁器（栗田焼の品質粗悪化に対し改良無霈のもの）
 - (b) 耐熱化学磁器
 - (c) 純白硬質磁器（輸出品としての高級品）
 - (d) 特別高圧碍子
- を詳細に記述した当時の貴重なる記録が残っている。
 又試験場の使命として次の事項を実行したと詳記している。
- (1) 品質の改良
 - (2) 製造費軽減

○明治三十六年度報告中より

試験成績中の主要事項を詳録せるもの次の如し

- (1) 石炭焼
- (2) マゼヨリ力焼試験
- (3) 黄釉硬質陶器試験
- (4) 白色無霈無鉛陶器
- (5) 釉下白盛試験
- (6) 窯変釉
- (7) 辰砂釉
- (8) 象牙色磁器の試験
- (9) 磁器釉下に自由に彩画を施す方法
- (10) 釉薬艶消法
- (11) 半磁器即ち硬質陶器
- (12) ラスター釉試験
- (13) 第五回内国勸業博覧会出品

尚今期九月廿六日商議員の改選あり次の拾式名囑託

伊東 陶山	橋本 為七	錦光山 宗兵衛	安田 源七	清風 与平	清水 六兵衛
谷口 長治郎	宮川 岸之助	松風 嘉定	小川 卯之助	酒見 外治	青木 銀治郎

職員職工の異動には

技手任命(十二月一日)

橋本 佑造

常備職工雇入(十二月十二日)

日給卅錢

菊岡 兼治郎

〃

日給十五錢

中小路 シヅ

伝習生入学許可

四月一日

清水 祥次

尚四月廿六日、本市貿易品御奨励の爲め北条待從職御派遣本場へ御巡視の榮を蒙りたりとの記事あり次に伝習生名に

石田 正文

の名あり何日入学かを詳にせず

○明治三十七年度報告書中より

試験成績中主要の事項として次の項目につき詳述あり

- (1) 栗田陶器の改良
- (2) 陶器着色釉
- (3) 無艶陶器釉
- (4) 粉碎器の改良(淡路産石英球石を使う)
- (5) 本窯釉下絵具
- (6) 磁器釉上絵具

(7) 月ヶ瀬陶土応用試験

(8) 各種器械の設備

○伝習生修了

二月廿二日第二期生修了

井上 清二

〃

新開 六郎

○伝習生入退学

五月一日入学(第三期生)

河村 半治郎

七月十二日入学

円山 篤雄

九月十二日入学

宇野 惣太郎

九月廿二日入学

早川 光三郎

十月十四日特別生入学

印度人 エス、デブ

七月一日退学

寺林 友造

○職員職工等の異動は

七月廿日 囑託技手拝命

三橋 清

十二月一日 常雇職工雇入 日給四十錢 木村 市太郎

○明治三十八年報告書中より

- (1) 陶磁器焼成窯構造改良の件
- (2) 各種窯変釉製造試験
- (3) 釉下紅黄色試験
- (4) 釉上深紅色顔料試験

- (5) 裝飾用軟磁器
- (6) 硬質磁器

○伝習生修了と入学

三月卅一日第三期生修了	清水祥次
〃	石田正文
四月一日第四期生入学	松林義一
〃	新開完八路
〃	張田勝治郎
〃	三田良一
〃	小島利太郎
十月一日退学帰国	印度人 エス、デブ

○職員、職工の異動は

五月十一日 助手任命 無給	清水祥次
十二月廿八日 依願退職	技手 中村昇
三月卅一日 常備職工雇入	吉川作松
六月廿二日 〃	吉森弥太郎
六月廿一日 解雇	菊岡兼治郎
九月二日 〃	吉森弥太郎
十一月一日 常備職工雇入	松井菊松

次に当時（明治卅八年）京都市に宛て報告書が提出されている記事中重複するものもあるも、当時の試験場の概観を知ることができるので記載する

こととした。

京都市立京都市陶磁器試験場概況

其一 本場ノ目的

本邦陶磁器製造業ハ其淵源遠ク太古ニアリ中古支那の製法ヲ伝ヘテヨリ以來稍々其製造法ノ面目ヲ改メシト雖モ尚ホ単ニ祖先傳來ノ旧習ヲ墨守スルニ止マリ現時ノ学理ヲ応用セル区域甚タ狹隘ナリ從テ其進歩甚タ遅々之レヲ比較的斬創ニ係ル欧州斯業ノ実況ニ比スルニ其技術ト云ヒ其産額ト云ヒ非常ノ徑庭アリ然ルニモ不拘我陶磁器名聲ノ尚ホ能ク維持シ得ラル、所以ノモノハ或ル天与ノ特種ナル事情アル為メナラスンバアラズ此事情タル之レヲ永遠ニ僥倖セントスルハ殆ド不可能ナリト雖モ幸ヒニ我豐富ナル原料人工其他製造上必要ナル条件ヲ考察セバ方法如何ニヨツテハ将来益々産額ヲ増加シ名聲ヲ發輝シ得ベキ頗ル有望ナル固有美術工業タルヤ明カナリ翻テ我京都市ノ斯業ハ其歴史土地原料ノ供給等更ニ一種ノ特情ヲ具備ス斯ノ如クニシテ我國陶磁器業ヲ放棄シ物質的ニ其進歩ヲ計ラサルハ邦家ノ為メ頗ル恨事ナルヲ以テ我京都市ハ他ニ卒先シテ去ル明治廿九年度ヨリ之レカ機関トシテ市立京都市陶磁器試験場ヲ設立セリ其創設當時ニアリテハ他ニ先例ノ拠ルヘキナク万事頗ル遺憾ヲ極メシト雖モ斯業ノ趨勢ハ決シテ其静止ヲ許サズ一方ニハ機械ノ応用、窯ノ改築原料ノ撰択等ニヨリ製造費用ヲ節減シ一方ニハ製造技術ノ改良、内外新規標本ノ蒐集等ニヨリ益々製品ノ品位ヲ高メ之レヲシテ単ニ小規模ノ裝飾品タラシメズ進ンテ一大工業品タラシムルノ必要ニ進メリ、本場ハ可及的其必須ニ応シテ徐々ニ経営ヲ怠ラス其間幾多ノ困難ニ遭遇セシモ創立以來十余年の屋霜ヲ經過シタル今日正に其基礎確立シ本場試験成績ノ多分ハ当業者ノ実地応用スル所トナリ誠ニ其好成绩ノ承認ヲ受クルニ至レリ之レ本場ノ最モ光榮トスル所ナルト同時ニ将来益々努力以テ其大責務ヲ尽サンコトヲ期ス只斯業ノ常トシテ其進歩ノ比較的遅々タルハ頗ル遺憾トスル所ナレモ亦皆止ナ得ザルナリ

其二 本場ノ畧歴

明治廿九年八月一日事務ヲ開始ス

同日 試験室建築工事ヲ始メ同年十月落成ス之レ等ノ地所全部ハ京都陶磁器同業組合ヨリ無料貸与セシモノナリ

同日 藤江永孝場長任命兼テ試験分析等ノ事業ヲ担当ス

同日 京都陶磁器同業組合員中ヨリ拾式名ヘ商議員ヲ囑託ス

明治三十年一月四日

設備整頓ヲ告ケ始めテ就業ス

同 三十二年一月八日

前年度市会ノ決議ニヨリ伝習生ノ入学ヲ許可ス

同 三十二年八月八日

場長藤江永孝陶磁器業研究ノ為メ欧州へ留学ス不在中技手森勇三郎ヲ代理トス

同 三十二年八月三十日

工学博士中沢岩太ニ顧問ヲ囑託ス

同 三十四年一月八日

第二回伝習生ノ入学ヲ許可ス

同 三十四年八月廿五日

場長藤江永孝欧州ヨリ帰朝ス

同 三十四年九月十五日

第一回伝習生ニ課程全部修了証書ヲ授与ス

同 三十六年四月廿八日

農商務省令ニ基キ京都市陶磁器試験場ノ認可ヲ得タリ

同 三十七年二月廿一日

第二期伝習生ノ修了証書ヲ授与セリ

同 三十八年三月卅一日

第三期伝習生ノ修了証書ヲ授与セリ

同 三十八年四月一日

第四期伝習生ノ入学ヲ許可セリ

其三 業務項目

一、当業者ヨリ陶磁器業ニ関スル一切ノ事項、試験、設計、説明ノ依頼ニ応シテ之レカ解答ヲ与フル事

二、陶磁器業ニ関スル一切ノ事項ニ就テ本場カ当業者ノ利益ト認ムル事件ヲ実地若クハ口授法ニ拠リ当業者ニ示教スル事

三、附属事業トシテ陶業伝習生ヲ教育スル事（別紙規則書添）

四、或ル範圍内ニ於テ陶磁器業ニ関スル図案製作ノ依頼ニ応スル事

五、或ル範圍内ニ於テ試験ノ成績ヲ実物ニ製造現示スル事

六、諸種ノ方法ニ拠リ陶磁器職工ノ業務ヲ奨励進歩セシムル事

其四 本場ト当業家トノ関係

本所ハ創設以來已二十年ヲ経過シ其間幾多ノ辛酸ニ遭遇セシモ幸ニ市当局者及当業家諸氏ノ熱心ナル庇護ノ下ニ立ち逐年其業務ヲ拡張スルヲ得

今ヤ稍ク其基礎確立セシヲ以テ将来進ンテ本市ノ斯業ニ貢献スルコト多カラン事ヲ期ス

本場ハ常ニ可及的当業家ノ業務ト密接ノ関係ヲ保タンコトヲ期ス故ニ依頼試験事業ニ対シテ試験料ヲ徴セス何時ニテモ極メテ平易ニシテ特更ニ手續ヲ要セス試験ヲ依頼シ若クハ質疑スルヲ得

本場試験事業ハ別表ニ示セル如ク尅箇年始ント百五十件ノ多キニ達セリ其結果ヲ一々依頼者ニ解示スルヲ以テ直接又ハ間接ニ本市斯業ヲ裨補スルコト渺カラザルベシ当業者モ亦今ハ本場ヲ信認シ安ンシテ依頼スルノ状況ナリ

本場ハ差支ナキ限り本場ノ焼窯ヲ使用スルノ便益ヲ当業者ニ与フ又製陶用ノ器械ハ或ハ外国ヨリ購入シ或ハ本所ニ於テ設計シ親シク当業家ヲシテ器械応用ノ実利ニ親炙セシム故ニ其式ニ倣ヒ現ニ製造家中ニ応用シ得ラル、器械器具数種アリ

本場ハ別ニ内外新古ニ涉リテ広ク参考品ヲ蒐集シ親シク之レヲ当業家ニ公示シ以テ其見聞ヲ広ムルコトヲ勉ム

本場ハ本市陶磁業ヲ害セス又本場ノ業務ニ差支ヲ生セサル限り他地方当業者ノ依頼ニヨリ之レガ質疑ニ対シ解答ヲ与フル事アリ

其五 本場創立以來累年ノ経費

年度	經常費支出額	臨時費	小計
二十九年度	二、八六四、九〇〇 円	二、九八七、八五〇 円	五、八五二、七五〇 円
(以下省略)			
三十八年度	七、七三六、三九五	七、六七、五七八	八、五〇三、九七三
(以下省略)			

此外地所ニ対スル経費ハ毎年度京都陶器磁同業組合ノ負担

其六 本市当業者試験依頼事項件数及他府県依頼又ハ視察ノ為メ来場セシ人数累年統計表

年度	本市当業依頼件数	他府県当業来場人数
三十年度	九十四件	九十五名
(以下省略)		
三十七年度	百二十七件	百二十一名

其七 土地建物
表省略

其八 標本類

表省略

其九 主要機械類

省略表

其十 職員及職工名
(明治三十五年度の職員表と異りたる者のみを記す)

技手 橋本佑造
嘱托 三橋清
助手 清水祥次
職工 吉川作松
" 木村市太郎
" 中小路シツ
以上六名が追加され
職工 菊岡瀧之助
" 塩見栄吉
" 松本カツ

以上三名が省かれている

其十一 商議員名

下京区五条橋東六丁目 陶磁器製造 小川卯之助
" 三条通古川町西入木ノ本町 " 画工 青木銀治郎
" 五条橋東三丁目 " 販売 酒見外治
" 清水坂二丁目 " 製造 松風嘉定
の四名が明治三十五年度の商議員に追加され

岡本寛治 吉岡吉之助
小島利兵衛 藤井孫六
の四名が除かれている
以上は明治三十八年末の記録によるものである

○明治三十九年度報告書より主要事項を抜萃すれば

- (1) 電気用磁器碍子試験
- (2) 不透質乳色磁器釉薬試験
- (3) 耐煮沸硬質磁器
- (4) 「ウーエ」氏マジヨリカ焼試験
- (5) 「コッペンハーゲン」式釉画法試験
- (6) 無線マジヨリカ焼試験
- (7) 無艶釉試験
- (8) 図案、絵付製作の件
- (9) 松風陶器合資会社工場設計及監督

伝習生入学

四月七日 第五期生 入江道之
十一月七日 清国人 韓 煙

職員進退

技手嘱託 四月十七日辞令 芝田理八
八月廿五日依願退職

技手に任命 九月四日 瀧田岩造

依願退職 三月廿七日 技手 安田乙吉

" 助手 清水祥次

商議員改選新議員次の如し(五月廿九日)

清風与平 清水六兵衛 宮川岸之助

酒見外治 平岡利兵衛 小川卯之助

松風嘉定 谷口長次郎 伊東幸右エ門

安田源七 錦光山 宗兵衛 俣野弁治郎

渡辺万次郎 耕山愛太郎 橋本為七

三浦竹泉 高橋道八 入江道仙

木村宇之輔 石田源治郎 村上武三郎

宇野仁松 岡田徳之助 宇野幸治郎

小島利兵衛

常備工異動

二月五日 常備工雇入 日給五十銭 木村甚之助
" " 日給卅五銭 佐野治郎吉
四月十二日 給仕雇入 日給十三銭 山添清一
四月廿六日 常備工雇入 日給六十銭 広瀬乙蔵

○明治四十年年度報告書中より

試験報告中最も主なるものは

熱度計(ゼーケル、コーン)実費配布開始

其他七項目あれども前年度と大差なし

伝習生は

三月卅一日に第四期生九名に修了書授与

四月一日 第五期生入学 木村弥一郎

" 井本米次郎

" 山口萬次郎

" 樋口恒好

" 横山正造

" 田原仙之助

" 川方哲二

四月十九日より 藤田友次郎

研究生入学

四十年七月四日 第四期修了生 新開完八郎

四十年七月四日 第四期修了生 松林義一

特別生退学

四十年九月一日 清國人学生三名

職員異動

一月十六日 技手嘱託 永井 洌

職工等異動

四月一日 常備職工雇入 日給廿錢 本多ステ

四月廿日 常備画工雇入 日給四十錢 新井昌夫

六月廿一日 常備職工雇入 日給八十五錢 林 滋能

“ “ 日給五十錢 中川 兵松

“ “ 依願解雇 吉川 作松

“ “ 佐野治郎吉

十月一日 常備職工雇入 日給五十錢 杉本富次郎

“ “ “ 横山与三松

○明治四十一年度報告書中より

本年度試験実績の主なるもの

(1) 釉画の際植物油の応用

(2) 磁製造花

(3) 石膏型を使用して食器類を製造する事

(4) 青磁釉薬陶器

(5) 機械力の応用

(6) 商品としての半磁器

伝習生入学

三月十八日入学

伝習生退学

四月一日退学

九月五日 “

四月一日 “

“ “

七月一日退学

職員異動

四月卅日 書記に任命

六月一日 技手任命

職工等異動

三月九日 死亡

四月廿日 常備に任命

七月廿日 依願解雇

“ “ 常備に任命

(以上試験場記録の保存されたるものより抜萃す)

○大正四年一月 場長 藤江永孝歿

○同 年 植田 豊 橘(工学博士)二代目場長となる

○同 年 模型科を設置

○大正五年四月二十八日 試験場創立二十周年記念式挙行

野村恒尚

樋口恒好

横山正造

藤田友次郎

川方哲二

新開完八郎

松林義一

“ “

特別研究生

近藤八四吉

小川多三郎

木村市太郎

藤村浅七

林 滋能

松井仁太郎

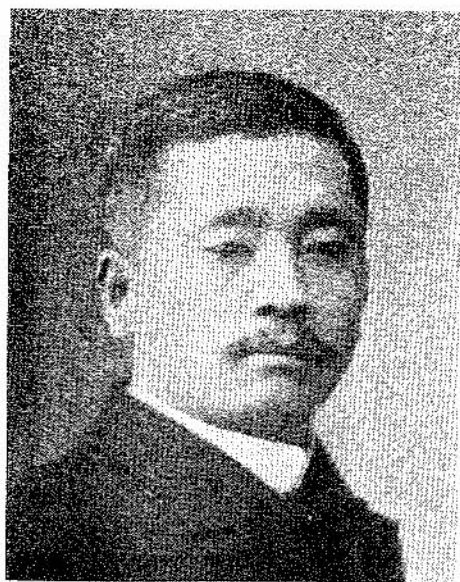
〔余 録 13〕

京都市の勸業方針と陶磁器試験場

〔大日本窯業協会雑誌第七十七号(明治三十六年二月)〕

寺沢知為の通信文

京都市の勸業上に於ける大方針二あり一は人物を養成して根本的の改良を計ると、他は今日現存するものゝ上に改良を加ふること是なり然れども市の設備は年々進歩し掛り技師は熱心事に従ひしより年月を経るに従い漸次其効果顕はれ現に「トロ、」石に混用する天草石の輸入少きに際し汎く近国を巡検して各種の原料を集め実験し、ために二、三の良石を得、天草石の代用として使用し得べきものを発見したるが如き其他各種の原料及び釉薬の試験の如き着々当業者の知らざる所を知らしめ其成績の見るべきあるを以て当業者は素より以外の人々さへも之を必要視するに至れり



藤江永孝
(初代 京都市陶磁試験場長)

藤江永孝場長

初代場長として、京都業界として、忘れることのできない恩人である藤江永孝に關し、大正四年一月五日死去当時の弔辞を抜萃してその偉業を偲ぶこととする。

(逝去は大正年代に入るが藤江の功績は明治年代であるので明治篇中に納めた。)

藤江永孝 略歴

金沢市の産れ、明治十三年石川県立専門学校理学科入学、十八年卒業、十九年東京職工学校陶器玻璃工科学、ワグネルに私淑する。専攻科

を経て、農商務省、東京工業学校に職を奉じ大日本窯業協会の設立に尽力、明治廿八年、備前陶器会社技師として石炭焼の連続焼成窯を築く、これが我が国での石炭瓦斯応用の嚆矢といわれている。同廿九年、京都市陶磁器試験場長として赴任、欧米に留学、又清国へも出張視察し、京都市陶磁器試験場をして本邦随一の名声を高めしめた。大正四年一月五日卒

○藤江永孝に対する弔辞

京都市立陶磁器試験場長、京都帝国大学講師、藤江永孝君の靈に告ぐ、我が京都市が試験場を設立せしは明治二十九年なりき、この時に当り招聘されて場長となり二十年一日の如く我等の指導者として其職に在り、将来益々斯業の為に教を乞うべきもの多かりしに、今日忽然として逝く、我等の悲哀何者か是れに過ぎんや、君の場長として就職さるゝや我幼稚なる窯業の為に先づ原料改善の急務なるを認めて広く各地の原料を蒐集比較して其良否を究め京都陶磁器の素地、釉薬、顔料等に新機軸を加え又旧来の手工業に代るに機械応用の普及を図り、築窯法の改良を称えて新材に代るに石炭の利用を勧め以て製造費の節約を促し、当市輸出陶器振はざるや半磁器を創製して輸出増進を謀り、内地陶磁器界が徒らに仁清、乾山、祥瑞の遺風に捉らわれて益々退歩の傾向あるを慨し、斬新なる意匠と新旧応用の調和に苦心し、以て京焼の声価を内外に高からしめ、更に建築用品及耐火陶業品を改良して其販路を拡め、多忙の身を以て大阪高等工業学校講師となり、人材を養成し又徒弟の養成に力をつくして伝習所を設け、職工奨励会、奨陶会、遊陶園を開催する等其他全国当業者の顧問として信頼を受け、我窯業界の為に貢献する事枚挙に遑あらず、本邦陶磁器界の今日ある実には君の賜物と謂うべきなり。京都は実に君の第二の故郷にして君の半生は其窯業界の為に尽して終れり、君資性温厚にして謙嚴、人と交るに表裏なく、他を教ふるに懇切丁寧にして、当事者を視る事愛児に接するか如く、当事者の君に親しむ亦親の如し、今やこの慈父を失う哀惜の情に堪へざるなり、君は篤学の士にして精力絶倫、休日と雖も夜半迄場長室に君を見ざる事なく、業に忠実にして頗る勤勉なる、読書の外に染なく事業の外に興味を持たず、薄給に甘して一生を研究と斯業の発展に資し、名を需めず財を貴はず、更に家庭を顧るなく、寢食をも忘れて孜々として學術と實際の調和に腐心せられ、其大なる抱負と該博なる学識とは将来益々斯道の為に傾注せらるべかりしに、業半にして倒れし君の遺憾は勿論、吾等当業者の痛惜に堪へざる處なり、吾等は君の遺業を継ぎ君の遺族を補け、以て君が志を全からしめ、他日簞底に山なす有益なる遺稿を纏めてこれを上梓し聊か君の靈を慰めんと欲す。

君の死は国家としては一の国宝を失ひ、窯業界は顧問としての指導者たる一大恩人を失ひたり、世上か君の功績に報ゆるの薄く、君の学徳は

俊に博士の力量ありしが未だ学位を受くるを至らずして終りしは頗る遺憾に堪へざる處なり、然れども君の病篤き事天聴に達し過去の勲功に対し特に位階勲等を賜わりしは名譽これより大なるなし、君以て瞑すへきなり、我等は君が京都陶磁器界に尽せし功績に酬ゆるの少なきを遺憾とすと雖も組員全部の希望に基き此処に組合葬を行ひて君の靈を祀り聊か君が生前の労に答へんとす。

嗚呼君の頑健なる風貌は我等の眼底より去らず、君の力ある声咳は我等の耳朶を去らずと雖も君今や即ち亡し哀哉。

大正四年一月八日

京都陶磁器商工同業組合総代

松 風 嘉 定

第九節 松風陶器合資会社

(松風に関する記事も大正年代に及ぶものが多いが、すべて明治篇にまとめた、閲読の便を考えてである)

伝統を誇る京都陶業界も時代の推移につれ変化と進歩があるのは当然である。明治の始め倉密局が出来て独乙のワグネル博士が指導の任に当り、同志社ハリス理化学校が設立されたりした後、京都市立陶磁器試験場の設立を見て京焼にも新風が吹き込まれ、進取に富む青年業者には多大の刺激を与えた。欧州式製造法を取り入れた京都陶器会社は時期尚早で解散のうき目を見たとはいえ、一面それにたづさわつた人々の経験も無駄ではなく、試験場の指導も其効果を顕し、松風陶器合資会社が設立されたのも其一つであり明治卅九年である。

この松風陶器合資会社は三代松風嘉定が、二代松風嘉定から引継いだ名古屋森村組の輸出陶器製造を独立して単独に神戸の外人輸出商と結んで製造するに及び、大量生産の必要を痛感して、神戸の貿易商鶴谷忠五郎、同じく山岸某の二人と計り、松風個人の工場を提供して近代式の工場組織を計画したのである。この計画は松風嘉定の熱意と試験場藤江場長以下技術員の並々ならぬ努力の結晶が実を結んだもので、名古屋の日本陶器会社と並んで建設された近代的工場であり、焼窯も独乙倒焰式円窯の二階を有するものを築いて石炭焼成の先鞭をつけたものである。会社は最初五万円の合資組織で設立されたが間もなく十万円に増資し、名古屋支店を開設して輸出陶器の絵付を専門に林武八を支店長として発足した。

松風陶器合資会社は輸出磁器を第一目的として計画されたものであるが、時宛も日露戦争後の輸出の打撃を受けたので、予ねてから試作しておつた電気用高圧碍子の製作をも並行作業することとして活発な動きを見せた。

松風陶器合資会社は、清水坂にあつた松風嘉定の工場の一部を移すと共に、紀伊郡深草村大字福稲小字岸ノ上（二ノ橋）に五千坪の敷地を卜して工場を新設したもので、明治四十年に大部分の落成を了し、四十一年三月倒焰式円窯の第一回焼成を行つたのである。明治四十二年農商務省から工業奨励の為匣鉢製造機械、粉碎機、石膏型成形機、型板保持機等の貸下げを受けた。窯業方面での製造機械民間貸付の嚆矢である。かくて工場は磚子製造に股賑を極め、大正六年には更に師団道路三ノ橋に第二工場を増設すべく四千余坪の土地を買収して工場建設を始め、電気磚子の外に化学用坩堝及磁器の製造をも始めた。同年米国G・E・会社から十万ボルトの電気絶縁試験機を購入して、磚子の絶縁試験を施行した事は当時としては破天荒の設備であつて、如何に同社が磚子製造に努力したかを窺うことが出来る。

大正六年松風工業株式会社として資本金貳百万円の株式組織に改組、社長松風嘉定、常務大瀧新之助の統率下に事業は益々發展した。工学博士北村弥一郎（元農商務省工業試験所第三部長）も其傘下に加わり研究に没頭した。大正八年七月夜半第二工場失火、約百坪を烏有に帰したが直ちに復活、原形よりも増大した工場を新築して作業をつづけた。又大正十三年四月労働争議勃発、約一ヶ月に涉つて労資対峙したが、不参加の従業員は社員と共に社内に起臥して作業をつづけ、結局会社の方針通り解決した。この争議は京都に於ては奥村電機商會のそれに次いでの大争議であつた。

明治四十三年十月三日は松風会社のみならず、京都陶業界にとつて光榮ある日であつた。大正天皇未だ皇太子におはせしが同日産業奨励の畏き御思召を以て松風工場に行啓あらせられたのである。この日殿下には御馬車にて伏見街道二ノ橋に、それより御徒歩にて社長以下役員一同奉迎裡に会社事務室二階の御座所に入らせられ、御休憩の後社長の御案内、大森知事の御先導にて工場に臨ませられ、原石粉碎室、粘土水籤室、原料製造器械室、原型室、輸出磁器成形室、電気用磁器成形室、施釉室、焼成室、絵付室、電気試験室、荷造室を順次御巡覽、又京都伝来の古陶器を陳列した参考室をも御一覽あらせられた。これは当時京都陶界のみならず我黨業界の特記すべき出来事であつた。

以上の様な経過をたどつて發展した松風会社は、我国水力電氣の異常な進展に伴つて、送電線用特別高圧磚子の製造に躍進し、其方面に於て名古屋の日本磚子株式会社と覇を争つた。又化学用磁器としてはSCPの商号の下に独乙製品と市場を二分し、米国にも輸出する様になつた。

尚松風工業株式会社に於ては我国最初の陶磁の製造研究に手を染め成功を納めた。それは大正篇に詳記する事とする。

松風嘉定

ここで松風工業株式会社の創立者松風嘉定に就いて記す事とする。君は明治三年愛知県瀬戸町に井上延年（本名円七）の長男に生れ常太郎と称し



三代松風嘉定

た。明治廿一年十九才の時京都に來り父井上延年及二代松風嘉定在職の京都陶器会社に雇われ明治廿三年松風家に養子となる。会社の解散後清水坂の松風家の清水焼に従事し輸出品に都盛を發明して声価を挙げた。君は同業者と相謀り京都市立陶磁器試験場の創立に尽し又陶磁器組合の組織を改善する等業界に尽す事が大きかつた。明治卅九年松風陶器合資会社を創立後松風工業株式会社に組織変更と共に其社長となつて隆盛を極めた。明治四十五年金沢の日本硬質陶器株式会社が経営不振に陥るや其難局を引受けて社長となり、社運の挽回を計り、大正六年には朝鮮硬質陶器株式会社が創立して、後にこの兩社を合併した。又京都陶磁器試験場の設備及敷地を国に寄附して国立試験所を京都に設立するの請願運動を起してこれに尽瘁成功した。尚内外電球株式

会社を創立し、大阪電機株式会社の経営に当り其社長となり、九州に炭鉱を買収して己が傘下に入れ、大正十一年松風工業株式会社に研究完成の陶磁製造を独立して松風陶磁製造株式会社が創立、其社長となる等実業界に於ける活躍は目を見張らすものがあつた。

大正十四年には京都商工会議所より選ばれて我国資本家代表となり第七回國際労働會議及第三回万国商業會議所總會に出席し、欧米を視察する等海外視察も二回に及んだ。

君が不斷の活躍は遂に病を呼び昭和三年五十九才にて病死、洛東高台寺に葬る。政府特旨を以て従六位に叙せられた。

君資性英邁事に當つて其熱意は非常なもので万事達成せずんば止まずの意気は公私の別なく輝いておつた、又人に接する親切にして苟もせず友人は皆君を外交官にしたらば国家の為最も有効であつたらうなどと噂したものである。大阪高等工業学校窯業科廃止問題や陶磁器試験場国立移讓問題等同君得意の説得折衝の如きは、將に面目躍如たるものがあつた。又君の事業に熱心なる特高磚子売込の時など先方電力会社の最高専門技術

者を集めて堂々と碍子の講義をなし関係者を囁然たらしめたものである。なかにも前記東山大茶会を主催し、全国の好事家を京洛の地に集めて其三面六臂振を発揮した事は有名なものであつた。

君が個人経営時代よりの工場協力者としては

焼成に 井上延二(実弟)
成作に 榎戸藤吉
陶車に 古河陽三郎(湖東焼、幹山焼より松風へ)
窯、施釉に 村瀬徳松(瀬戸の人)
製型に 堀場為二郎

等があり会社組織となつても引継ぎ勤務した。

又会社組織となつてからの有力なる協力者は長男俊一、次男憲二の外

常務に

大瀧新之助(京都辨護士会長)

技師長に

北村弥一郎(工業試験所第三部長工学博士)

製陶技術顧問に

藤江永孝(京都市陶磁器試験場長)

電気技術顧問に

小木虎次郎(京大教授工学博士)

経理面に

中内惟一 仙石鎌次郎

製陶技術面に

藤岡幸二 一条茂喜司 橋本佑造 関岡正雄 大村関智 安田晋三 松風栄助

電気技術面に

西野計之助 内藤円曹 山谷為吉

販売方面に

若山鴨雄 高橋孝作

等々多士済々たるものがあつた。事業は人にありとの真実面を松風が如実に実行したともいえる。

第十節 高山耕山化学陶器株式会社

高山家の祖は源兵衛と称し、ゑびやと共に五条清水においての代表的陶器商であつた。

明治初年(三十四年)造幣寮(造幣局の前身)で硫酸瓶を入用としたので、英人技師が京都にきて、丸屋、高山耕山の店先の茶壺を見て硫酸瓶を注文し又、英国製耐酸煉瓦を見本としてその補充製品の製作を依頼した。これが高山家の化学陶器に入つた第一歩である。このとき耕山源兵衛(本名、高山源兵衛)は政府の技術顧問に委嘱せられている。

源兵衛の長男愛太郎は耕山家を継ぎ、次男幸治郎は中村家の養子となり、三家協力して耐酸陶器の製造に努力し、明治十三年には、東京印刷局及び大阪アルカリ会社へ塩酸製造装置を、同十四年には関東酸素会社(今の日産化学)へ硫酸製造装置を納め、一方、耐酸釜、レトルト、蒸発皿、電池用素焼筒、電磁器等を製造している。またこの頃の化学工業の先覚者、松井源太郎、西川虎之助、石藤豊太の各博士、石川卯一郎等が耐酸陶器製作の指導に當っている。

明治十四年には五条橋東四丁目の工場を拡張し、本町二十丁目に分工場を設けた。

明治二十三年には硫酸製造装置、火薬爆薬製造装置を陸海軍に納入した。この頃中村幸治郎は独立し、大仏の北側に工場を新設している。この幸治郎の次男の順太郎は高山家を再興して高山製陶所を開き、明治四十三年四月長男の中村孝藏を欧州特に英国に留学せしめた。孝藏は大正四年六月帰朝して、焼成窯の改良、鋳込及プレス法等の新しい技術を註入、同五年五月高山耕山陶器合名会社を創立、本社工場を千本七条(現中央市場附近)に敷地約八千坪を擁して建設、同七年四月組織変更して、高山耕山化学陶器株式会社が誕生した。このときの会社幹部は

専務取締役	中村幸治郎
常務取締役	耕山愛太郎
“	高山雄次
取締役	加瀬忠次郎
“	石川一郎(石川卯一郎息)
“	工博 吉川亀次郎
“	高山順太郎
“	中村孝藏
監査役	工博 石藤豊太



昭和7年～17年の
高山耕山化学陶器株式会社社長
中村孝蔵

であり、昭和七年に中村孝蔵が社長、取締役には前記の外工場長として高山泰蔵、同支配人田村好素、同中村清等の顔が見える。同十七年には高山雄次が社長に、昭和十九年十二月には大野政吉が社長に取締役が高橋畫一郎が入っている。

昭和二十四年には三光陶器株式会社に改称し、輸出向洋皿一日、一万枚製造を実現したが為替の変動で業績上らず同年末解散した。

尚、高山耕山化学陶器株式会社全盛時の概略は次の通りである。

製品 化学工業薬品製造装置の設計及工事の請負。耐酸陶磁器、化学磁器、耐酸煉瓦、耐火器材。

資本金 五〇〇万円

従業員 二五〇名

設備 使用馬力 一八九馬力

焼成窯 二四基

註、明治四十三年府統計書によると化学用陶磁器の製作は次のように記されている。

名称	主要製品	所在	創業
耕山製陶所	化学工業用陶磁器	下京区五条橋東四丁目	明和年間
今堀製陶所	"	下京区大和大路五条下ル	明治二十年
石田製陶所	"	下京区大仏前	安政二年

第三章 明治時代の業界事情

第一節 生産に及ぼした諸事情

(編さんに当り蒐集した各種の資料中より、既述したものを除き参考となるものを掲載する)

農商務省統計によると、維新以来陶磁器の生産は急増を辿り、十年頃は西南役の影響で一時的に下降し、十一～十四年頃にかけては輸出が急速に伸びて海外依存度が高くなった。

京都も栗田陶器を中心に輸出が旺盛で十年代の府下生産高は有田、岐阜、愛知についてわが国第四位となっている。ついで明治十四年頃を頂点として輸出は下火となり、これより十八年頃迄は輸出不振に加えるに国内需要も低下して不況となり、業界は大きな打撃を受けた。例えば十三年の府下業界の輸出は三八万九千円であつたが同十七年には二万二千円、同年の内地販売高は僅か三万九千円に落ち、深刻な不況を示している。

なお、十一年から十四年にかけて好況の原因は「京都府著名物産調」によれば、西南役後の紙幣増発による物価騰貴と、北海道方面での新しい磁器の需要地を獲得したことによると述べている。

十五年以降二十年頃までの生産下降は一般物価の下落、貿易の不振、十八年の各地の水害による米価暴騰による購買力の減退、淀川氾濫による大阪方面の販路の支障等があげられている。

この間の栗田、清水の生産については、明治十七年前の資料を欠くが、府勧業統計報告によれば、十七～二十三年頃までは二十年を除き、清水の生産は栗田陶器の半分に過ぎず、依然栗田が繁盛している。明治二十一年の同資料によれば、米価低落による一般の不況により、清水の生産は延びなかつたが、栗田は海外商社の信用も増大し、クリスマス用として、英、米、独、清等より大巾注文を受けて商況活発であつた。

註、この当時において売行のよかつたものは、栗田では、花瓶、香炉、壺、清水では国内品として仁清、乾山風のもの、外地向では古伊万里の模造品、小形盛金花瓶、円皿等である。

二十二年～二十四年頃は、国内景気の回復により、市況も活発となり、二十五～六年の、濃尾震災により、同地陶磁器工業の損害が大であつて、価格が高騰し、中国(清)英領印度方面よりの需要も増加してきたので、これまで内国向生産を主としてきた清水も其方面の伸長目ざましくその

生産額を二十三年、六万八千円、二十五年、一九万二千元、二十六年二万三千円と上昇したが、他面栗田では海外輸出を主とするため生産は伸長せず、反つて、稍や、減退の状況であり、ことに、二十六年は、銀貨相場の変動を受けて、貿易不振となり、又、二十九年の相場の甚しい変動は、米国向輸出の、停滞となつて現われ、大巾の生産減少を招いている。栗田と清水は全く、対蹠的な経過を辿つてきたのである。又、明治末期になると、再び栗田陶器の生産が増大し、特に明治三十九年、日露戦役後の好況は、府下産額、陶器七万四千円、磁器、三六万六千円となり、上昇機運をつかんだのである。

第二節 雇傭関係と労働概況

1 雇傭方法

労働者（職工といつた）傭入の方法は、明治維新前後は、通常年期奉公と称して、幼年より、十一二十年の年期契約として傭われ、満期後は、傭主からその家号を受けて、別家、本家の関係に入り、独立営業をするか、通勤勤務をしたものである。

明治に入り、斯業の隆盛に伴ない、他産地からの職工の流入もあり、一部には、日雇、月雇、又は請負（一個当り何錢と請負う）制度も見られるようになったが、大部では、依然旧態を保つて、唯、その契約期間が稍短縮して、三―五年の期間を採るものが増えている。

「のれんわけ」

高度な技術、特技を要請される、手工芸的存在である京焼業界にとつて徒弟制度は古くからのしきたりとなり、現在においても一部になお、これに似た存在も認められている。

当時の制度として、親方に弟子入した者が、専念陶器造りに務め、所定の年期を終ると（年期奉公）親方から棧板何枚（親方の屋号を入れて、何々屋とあり）とか「ろくろ」を貰い、親方の屋号の一部を採つて別家したものである、これを「のれんわけ」といつた。

2 給与

賃金は年期契約者の外は、毎月末に支給し、賄付の分に対しては、その給与分を時価に換算して毎月末給与より差引していた。

又一般に労働者には従来から賃金前借の風習があり、工人は、日ぜにを持たない事を自慢にする等の悪習は、月末給与支払のときに甚だしいの

は、前借差引受取金なしというものもあり、貯蓄心もなかつたようである。

「名工の貰い下げ」

当時は、現在と違い、生活も楽で、腕の立つ職人の鼻息は甚だ荒く、随つて非常に呑気で、今日は働いて翌日は博ちかけ銭、その翌日は働いて、前借りして遊里へと所謂「日ぜにを持たぬ」といばつていたもので、京都から大阪まで遊びに行き、帰れない職人を親方が、飲食代を持つて大阪まで迎へに行き、貰い下げて来たという「名工の貰い下げ」と称して、一部の職人の自慢であつたといつてゐる。

3 労働時間

大部は、慣習により之を定めて、一般に、日出より日没までとし、冬期や多忙時には、午後六時より十時まで夜業を行つていた。休日には毎月一日、十五日、と大祭祝日、氏神祭礼日、一月一日より三日、七月十五―十六日、十二月三十、三十一日が通常となつていたが、しめの内、と称して一月は十五日迄、春秋の彼岸、身内の冠婚、葬祭、法事と称して、欠勤するものも多く、又他面、年期奉公者は所定の休日も家事労働に使はれることが多かつた。

4 労働問題

以上、各項でその一部を述べたが、伝統と特技を重視する京焼業界では、永年家内工業を中心として発達してきたので、技術習得のための、徒弟奉公をするのが例となつていた。

明治初期、栗田を中心とする輸出品の伸長により経営規模の拡大に伴い、従業者も徒弟のみでは不足し、自然、熟練者の他産地よりの導入となり、一般徒弟従業者も次第に勤労者としての自覚を持つようになり、労働問題にも漸時関心を深めて行つた。

但し、当時の業界では個々の企業体においての労資の斗争は見られず、同業種労働者の共同斗争の片鱗を見出すのみであつた。

（明治二十九年二月号大日本窯業協会雑誌第四十二号に始めてこの問題が採り上げられ、次のように記載されている。）

京都陶磁器商工業組合にては先日來職工より手間賃値上げの事につき、頭取に向つて談判中なりし処、今回愈々双方間の協議まとなり値上する事となりしが、従來職工と問屋間には密接の関係あるに拘らず疎遠となり居るを以て去る紀元節祭日、河原町共楽館に於て同業者全体の懇親

会を開いた。と。

この業界での初の労働争議は、明治三十年頃のいはゆる「加賀退治」と称する同じ労働者を排撃する凡そ目標と異つた争議であつたが、その内に蔵せられた目的と精神は、大正時代に行われた共同ストイラキのさきがけとして注目すべきことであつた。

「加賀退治」

栗田陶器の輸出伸展に伴い上給付、彩画加工には従来の京都の職人のみでは不足となり、勢い、九谷、小松等の加賀（石川県）方面よりの移住職人が増えた。

由来「加賀つば」と称して石川県人は勤勉であり、前述の「名工の貰い下げ」等と自慢する地元の一部職人より、能率はよく、自然好遇され、賃金も上つていたので、地元職人はこれらの人にその地位を奪はれる心配と、賃金の過少を不満として、石川県人の排撃を名目として、同県人を雇傭する工場の職人がよつて雇傭主にその退職と賃金平衡を要求し、ストライキを行つたもので、石川県人こそ迷惑至極なことであつた。

当時加賀人は多く京坂地方へ来て労働に従事しており、京洛では「加賀ツボ」の歩くところ草も生へぬとか、「加賀ツボ」はこけてもただでは起きぬ、などといわれて其働き振りを笑つたものだが、勤勉なる加賀人は風呂屋其他に多数の成功人を持つておつた。

第三節 商 取 引

江戸末期より明治初年にかけて商取引方法は既に述べた通りであり、相互に他の領域を犯さず、製造家―問屋―仲買―小売とほぼ確定されていたが、明治十年前後より、貿易の進展と相まつて、直接製造家―各地商人又は消費者と取引するものも増加し、輸出品は、神戸、横浜の外国商社や代理店と特約、製品は直接又は問屋を経て納入していた。

代金決済は、輸出は検査後、内地は毎月末がその大部分であつた。

この時代に盛業を誇つた問屋は五条地区を主とし、平岡、西吉、西田（貿易）たち吉等であつた。

第四節 焼成窯使用の慣習

連合窯の成立

窯持は自己窯を使用し、他に貸与することはなかつたが、明治十七、八年頃になり、従来の業者間にも消長があり、又窯も稍大型のものが多くなり、窯持と窯を所有しない陶業者間に協議が成立、連合して焼立をするようになった。これを連合窯という。

これにより一般の業者は便利となり、連合窯は数戸連合使用するので、多量の受注と、日限品の製造にも応ずることができるようになり、燃料、工賃の節減にも役立つた。現在でもこの様式が存続している。

明治三十年頃の記録による「京都陶磁器沿革」中より窯に関する記事を抜萃する。（原文のまま）

窯ノ沿革

窯ハ清水栗田共ニ往古ヨリ変化シタルヲナシ然レハ文化天保年間ヨリ磁器ノタメニ築キタルモノニアラサレバ薪材の費用多キヲ以テ種々経験ノ末従来ノ窯ニ少シク勾配ヲ強クスルノ利アルヲ発見シ安政年間ヨリ之レニ改良シ且維新以後ニ至リ少シク窯ヲ大ニナシ明治十七八年頃聯合窯ノ設ケアルヨリ一般ニ窯ハ大トナレリ

窯使用ノ慣習

従来陶業者ニシテ窯ヲ有スルモノヲ窯持ト云ヒ窯ハ自己使用ノ外他人ニ貸与スルヲナシ然ルニ明治十七八年ノ頃ニ至リ窯持ト窯ヲ有セザル陶業者ノ間ニ協議ヲナシ終ニ聯合ニテ焼立ヲナスニ決シ茲ニ始メテ聯合窯ノナルアリ為メニ一般ノ陶磁業者ニ非常ノ便利ヲ与ヘタリ聯合窯ナルモノハ製造家数戸聯合使用スルモノナレバ日限アル所ノ注文品ニ対シ応需スルノ便アリ僅少ナル物品ニ窯ヲ焼立ツルノ煩ナク加之燃料或ハ工手ノ賃銭ヲ減スルノ利アリ而シテ其焼立ニ当ツテヤ磁器ハ一ノ間ニ入レ二ノ間以上ハ陶器ヲ入ル、モノナレバ燃料ノ如キモ二ノ間以上ニ至レバ一ノ間ノ火氣ノ多ニ其燃料ヲ減スルカ故ニ二ノ間以上ヨリ薪材百拾束ヲ一ノ間ニ補ヒ以テ燃料ノ平均ヲ計レリ之レ目下窯使用ノ慣習ナリ。

第五節 原 料 供 給

京都には陶器原料としては極く一部のものより産出せず、その大部を天草、滋賀、岐阜、愛知其他遠隔の地から求めていたが、原料獲得は小規模経営であるためと、精製に多額の経費が要する等の不便があり、時としては原材料の不整一より、製品に失敗を招く等、不便を感じていたので業界では原料供給専門工場の出現が望まれていた。

その要望にこたえ、明治三十二年には、京都陶磁精良合資会社（五条橋東六丁目）が設立され、原料販売に乗り出したが、更に本格的陶料供給のために明治四十四年金岩原料工場を主体として日本陶料株式会社の設立を見た。その後第一次世界大戦後までには供給業者も追々に増加し昭和十五年には、十一工場を数えるに至った。

日本陶料株式会社

業界多年の要望であつた陶料専門工場の設立案は、工学博士高松豊吉等の努力により、明治四十四年十一月十五日、東京商業会議所で日本陶料株式会社の創立総会が開かれた。

発足当時の会社資本金は二十五万円であつたが、当時の京都の陶料供給会社としては思い切つた大資本といわれよう。

又会社幹部の顔ぶれは、社長、渡辺朔、常務、金岩虎吉、野坂當治、取締役、星野錫、奥村安太郎、監査役、奥繁三郎、伊藤幹一、技師長は元京都大学教授細木松之助（工学博士）の一流人を揃え、創立当初の株主、四十三名の中には、澁沢栄一（東京）伊藤幹一（東京）中野武宮（東京）渡辺朔（東京）稲垣恒吉（京都）、服部金太郎（東京服部時計店主）大橋新太郎（東京、博文館社長）、村井貞之助（村井銀行頭取）馬越恭平（東京）、浅野総一郎（東京）大沢徳太郎、田中一馬、内貴清兵衛、中川徳右衛門（島原角屋）津田栄次郎（以上京都）等の東京、京都の財界人が名前を連ねている。

技師長細木博士は東京工業学校教授として欧洲に留学し帰朝後、京都大学教授をつとめた応用化学界の権威である。

本社を下京区（現東山区）馬町通本町東入四丁目鐘鋳町四一五に、工場を紀伊郡柳原町字七条裏（現本社及工場所在地）に約三七〇〇平方米（一、一〇〇坪余）を画して創立された。

創立当時、金岩虎吉経営による日本陶磁器絵具製作所（南禅寺及び浄土寺町に工場、白川村には水車を動力にする工場を有した）を吸収し同所の名古屋出張所の業務を引ついだ。

供給原料は上石（磁器）半磁器、栗田生地、釉薬、本窯及後絵絵具等を製造し、瓶栓材料として磁器原料を供給していたが、後に至つてこれが電磁器原料となつたのである。

その原石は、天草、出石、岐阜（蛙目）等で現在と大した相違はないが、出石（但馬）は本社の所有山となり、出石柿谷の有名原石を独占して

同地の武田角藏とていけいして優良原料を供給する様になつた。

当初の生産は月産二十三万貫で、地元は勿論遂に名古屋（瀬戸）多治見、会津方面まで販売され、京都の松風工業、錦光山工場にも供給されている。

同社の経営は、大正七、八年より売掛金のこげつきにより、経理状況不良となり、山中義次郎、玉川直道等入社して極力努力したが、逆に大正十三年には経営の行きづまりとなり一時は危機を叫ばれたが、漸時立直り、今日に至つてゐる。

註、日本陶料株式会社設立当時の原料価格（販売）

上石、百貫には 六円九十八錢一厘（大正末期では二十七円）

絵具 一听到付 二円三十五錢三厘

要するに同社は、京都の陶磁器の盛業、特に松風工業、錦光山、京都陶磁器等の当時としては比較的近代化された工場に刺激され、設立されたもので、現在でも京都陶業界の原料提供の中心として盛業しているが、京都陶磁器界の影の力としてその功績は大である（尚陶料会社は一部人造砥石の原料をも製造供給している）

次に「京都陶磁器沿革」中より原料関係の記録を摘録する（明治卅年頃の記録である）

原料供給先ト当業者ノ関係（原文のまゝ）

原土ハ古来大阪及京都ニ商人アリテ此商人ニヨリ供給セラル然ルニ往々狡猾ナル商人アリテ原土ニ不正品ヲ混淆シ本業者ニ意外ノ損害ヲ蒙ラシムルヲ屢々ナリシヲ以テ時ノ異組合頭取井上松兵衛ハ之レヲ慨嘆シ明治廿六年四月自費ヲ以テ原料産地ナル肥前天草ニ至リ所有主上田松彦ナル者ニ就キ実地ヲ取調べ且其製法ヲ教授シ将来全島高濱産ノモノヲ使用スルヲトシ其價格ト直送ノ特約ヲナシ今年八月帰京セシ以来本業者ノ奸商輩ニ迷惑ヲ受クルノ患ナク大ニ企業者ニ利益ヲ与ヘタリ、

現今使用スル原土ハ磁器ニ在テハ肥前天草、近江信楽、南山城大河原産ノモノ、又陶器ニ在テハ近江信楽土、近江各所産白絵土、大日山、南山城鹿脊山、全童仙房等産ノ交セ土、備前三石産蠟石粉等又釉薬ハ陶器及磁器共天草石及ヒ檮灰ヲ用ヒ下等ノ陶器ニハ近江産六地藏石（天草代用ト云フ）或ハ藁灰紺屋灰（染物紺染屋使用ヨリ出ル）等ヲ用ヒ又窯道具用原料ハ南山城鹿脊山、全童仙房、大佛山産地土ト称スル者ヲ混用ス而シテ天草、大河原ノ原土ハ直接取引ヲナシ毎回原料到着ノ上送金シ又近江信楽土ハ彼地商人ヨリ購求シ毎月末ニ精算スルノ習慣ナリ、顔料、和

絵具ハ悉ク本業者家々ノ秘法ニヨリ之レヲ製造シ西洋絵具ハ大阪商人ノ手ヲ經テ購入ス而シテ取引ハ凡テ現金ナリ、薪材ハ宇治田原白河産出ノモノハ最モ窯ニ適當セリ是等ハ皆京都伏見商人ヨリ買ヒ入レ直接山元トノ取引ヲナサス精算ハ總テ現金取引ノ習慣ナリ

原料価格ノ高低、原土及顔料ノ価格ハ時ノ物価高低ニ伴ヒ僅少ノ差アリト雖氏別ニ記ス可キ程ノ変動ナシ独リ薪材ニ至リテハ山林濫伐ノタメ薪材ニ不足ヲ生シタル結果十年前ニ比シ殆ンド倍価ノ騰貴ヲ來タセリ

原料 価格 (既往廿五ヶ年ヲ大別シ其時価ヲ示サハ左ノ如シ)

種 別	仕入地方	二十五年前	十年前	五年前	最近
天 草	熊本県天草郡	一万斤ニツキ 五二円	一万斤ニツキ 六〇円	一万斤ニツキ 七五円	一万斤ニツキ 八五円
信 楽	滋賀県甲賀郡	同 四〇円	同 四二円	同 五〇円	同 六四円
磚	日向 國 同	三〇円	同 三五円	同 三五円	同 四〇円
附 記					
鹿脊山土交セ土					四十貫ニツキ 〇、四八〇円
大河原産石					同 一、二〇〇
童仙房産交土					同 〇、六〇〇
大日山産交土					同 〇、八〇〇
三石産蠟石					十六貫ニツキ 〇、四八〇
近江下田産白絵土					同 〇、八〇〇
大仏山産土					同 一、五〇〇
					十貫ニツキ 〇、〇四五

第六節 京都の絵付工場

明治十四年頃よりの、海外需要の転換期に際して、日本陶器合名会社(名古屋)の前身である森村組は、販売を主とする商業活躍から、明治二十五年に輸出向製品の製造に乗出し、素地を東京に運び、絵付後横浜から積出したが、一方京都の石田工場(石田佐七)も特長のある絵柄で有名

であつて、錦光山からも製品を求められていたので、瀬戸の素地を京都に運び、石田工場等に絵付を請負はした。日清戦役後は、対米輸出の拡大に伴い、製品の統一と、経営の合理化のために京都の絵付工場もその大部は名古屋に移転した。

なお、本文と重複するところもあるが、伊勢本一郎氏著、近代日本陶業発展秘史(技報堂発行)に左の記事があるので抜萃する。

輸出陶器絵付工場と京都(森村組関係)

明治廿三、四年頃東京では河原、杉村、藤村、安立、の四工場、京都では石田工場名古屋では西郷工場が出来て各自の特長の絵柄を引受けたものである。この頃の絵柄は地色に玉子茶ぼかし、金盛栗穂に小菊というのが大流行で長年の間この絵柄がつづき、輸出口と言へば殆んどの形にこの絵をつけた、河原、杉村、石田が主に絵柄を扱い藤村は金ダミ白抜桜、安立が円子ぼかし金盛小菊、西郷が水金唐子等が得意であつた。

尚明治廿六年にシカゴで万国博覧会が開かれた時名古屋の大倉氏(森村組)が見に行かれ輸出陶器には洋風の絵付でなければならぬと感じられ必要な絵具や筆等を買集めて帰朝早速東京と京都の絵付工場で洋風絵付の試作を試みさせたが東京工場の方が京都工場のものより遙に優つて居つたので洋風絵付は東京の河原工場で作らす事になったという。この時代の輸取出投品としては瀬戸素地に絵付したもの、外に栗田焼、九谷焼、薩摩焼、七宝人形、玩具等で会津の土瓶や名古屋の土瓶も扱つたが栗田焼の花瓶は随分大量に売れたものだつた。

明治廿七八の日清戦争後日本品の声価がアメリカの隅々に普及して売行が急激に増加し瀬戸では毎日夕方になると大空が黒煙蒙々全力作業の盛況を呈するに至つた。然し従来からの仕来りで素地を瀬戸で作り名古屋に運び更に名古屋から東京と京都に振分けて搬出し東京、京都で絵付をして横濱と神戸とから船積するのでは甚だ迂遠なので遂に東京と京都の絵付工場全部を名古屋に集中する事に決め、東京から河原、杉村、藤村、安立の各工場京都から石田工場を所属画工とその家族全部を含め名古屋に移転させるという大事業を敢行したのである。

第七節 陶 芸 界

明治維新後、京都の陶芸家は、伝統の技術と、新しい原料、製法を融和さして、華やかな時代を築き上げたが、その個人の業績は別稿に譲り、華々しい活躍をした人は、二代目清風与平(弘化元年(一八四四)―明治十一年(一八七八)―三代 清風与平(嘉永四年(一八五一)―大正三年(一九一四)―四代高橋道八(弘化二年(一八四五)―明治三十年(一八九七)―三代清水六兵衛(文政五年(一八二二)―明治十六年(一八八三))

四代六兵衛（嘉永元年（一八四八）—大正九年（一九二〇））初代伊東陶山、錦光山宗兵衛等である。明治三十六年には、工学博士中沢岩太、藤江永孝等の肝入りで、浅井忠画伯、伊東陶山（初代）、清水六兵衛、錦光山宗兵衛等により遊陶園が組織され、業界の進歩に資するところであった。

遊陶園（窯業協会雑誌一四六号、明三七、一〇）

陶業者と図案家の有志により成立し園友は十七、八名であつたが、美術工芸品や普通商品の図案を實際器物にする目的で、一年に五、六回園友が輪番に会主となり開催した、当日図案家は新図案を、製陶家は前会に受取つた図案により作つた作品を持寄つて各自に批判し研究の後図案、製陶共に改良すべきは改良し、園友多数が優良と認めれば、その作品の箱書付をし（図案家、製陶者自身記名捺印）遊陶園の記名、園印を押して、販売価格も一同の評決により定めて販売しその一割を園費としていた会で、非常に好評を得て注文も多かつたようである。

京都陶磁器陳列所（大日本窯業協会誌第壹号明治廿五年九月雜報所載）

従来、京都の名産を以て譽を得たる、五条坂、清水坂の陶磁器は一時栗田陶器輸出需要の多きため庄せられし姿なりしが、近來大いに其技の進歩せしより、続々内外人よりの注文もあり、先頃五条通若宮八幡前に五条清水陶磁器陳列所を設け、内外国人の縦覧をなさしむることとなせり。去る七月十六日同所にて品評会を開き、岸光景氏を品評長とし出品の優等なるものに褒賞授与を行いたるが、其褒賞を得たるもの左の如し。

一等賞 高橋道八、清風与平、吉岡吉兵衛

二等賞 平岡利介、谷口卯三郎、宇野幸次郎、谷口長次郎、和氣龜亭、遠藤平橋、梅原竹次郎

三等賞 狩野喜三郎、奥村安太郎、真清水藏六、宇野仁松、柴田辰之助、雲林院熊之助、生徒三名、伊藤平八、八木照久、松田六平

四等賞 喜多見宏之助 以下九名

五等賞 黒田良光 以下十名

大日本窯業協会第三回總會

明治廿八年七月六日第三年總會を洛東建仁寺方丈で開催されたがその際、窯業品展覧会を併設した、その記事次の通り

京都窯業品展覧会

建仁寺方丈の一部と奥殿数室に展覧されたその主なるもの次の通り。

品川彌二郎（子爵）出品源内焼平鉢、角鉢

帝国博物館出品 玳皮盞

京都 船橋繁之助氏出品 乾山水指、仁清蝙蝠式花瓶

京都 鳩居堂出品 木米造交趾模土瓶

京都 大橋四五六氏出品 木米作揚名合利涼爐模

京都 山田定七氏出品 七宝鶏香爐、仁清向獅子香爐、仁清雞香合

京都 秋竹堂出品 仁阿彌造急須

京都 小泉新介氏出品 永樂保全交趾模角鉢

京都陶磁画競技会（大日本窯業協会雑誌明治三十一年六月第七〇号）

従来も開催せられたが明治三十一年五月十六日開催せられた第三回京都陶磁画競技会第三回授賞式の受賞者は次の通り。

画題

染付牡丹の意匠（4寸皿）

一等賞 京都陶器会社方 伏見有卿	二等賞 林定二方 山田健次郎
------------------	----------------

井上柏山方 加藤徳次郎	三等賞 清水六兵衛方 山田久兵衛
-------------	------------------

石田方 島田源次郎	石田方 安原卯之助
-----------	-----------

二等賞 木村方 佐野常次郎

京都陶磁器奨励会第一回大会（大日本窯業協会雑誌第八十三号明三二、八所載）

明治三十二年三月二十六日、陶磁器試験所に於て、藤江永孝会長となり開催、会頭に中沢大学長を推して第一回製品審査を行った。ついで六月十六日第二回奨励会が開かれた。

京都磁器発展策（奨励会）（九、一三、大阪時事新報所載）

京都の製陶界にては旧型の墨守を廢し時勢に適應して大いに斯界に新機軸を出す所あらんと目録見にて今回九鬼男爵初め大森知事、中沢博士、内貴、西村（治兵衛）雨森、藤江の諸氏主唱となりて奨励会を京都市五条坂陶磁器試験場内に設置した。その特色とする所は春秋二期斯道の技芸家より新作品の出品を求め、これを陳列して有志者の観覧に供し優等品を購入し特に鑑秀なる者へは賞与を行い以て斯業の発展を期するにある。

会長は九鬼隆一（男爵）幹事は中沢岩太、雨森菊太郎、錦光山宗兵衛、松風嘉定、藤江永孝の五氏で、十一月中旬、岡崎町美術協会で第一回を開催す。

明治四十一年三月京都陶磁器奨励会の記事は次のようである。

第八回奨励会

総出点数は一五五、総出品人数一〇五、受賞者は総計四八名であつた。

第八節 京都府の業績

明治三年 勸業場（河原町二条下ル旧山口藩邸）内に舍密局仮局を設ける。

明治十一年 独人、ワグネルを招き、化学工業品の製作即ち、陶磁、七宝、琺瑯、玻璃、工業薬品等の製造を指導せしめた。

明治四年—十三年 産業振興策のため、毎年博覧会を開催した。

明治五年—以降 物産引立總会社が五年以後物産引立会社となつて一事業会社として発足するや、同社の事業の一として、相楽郡童仙房開拓地に移住窮民授産のため、同地で陶器の製造を行はしめた。

明治二十年 府費を支出して、陶磁器、織物、染物、機械製作等について留学生をフランスに派遣した。

第三篇 大正篇